求道

宣教師會圖書

第參卷　第貳號

明治卅一年十二月廿六日　第三種郵便物認可

明治卅九年三月一日發行（毎月一回一日發行）

求道第參卷第貳號目次

求道

◎信仰の中心
◎信後の修養
◎自ら計ふ勿れ

感謝

◎如來廻向◎聖人の消息◎歎異鈔と末燈鈔◎無上の慰籍◎講話と告白◎常行大悲◎報恩謝德

講話

◎招喚の聲　近角常觀

聖傳

◎ジヤータカ釋尊傳——幼時　齋藤たい

告白

◎不可思議の佛緣　宮澤政治郎

◎所感

研究

◎讀書漫錄　常盤大定

講義

◎嘆異鈔——序說　近角常觀

嘆咏

◎日知の釜《連作短歌》　左千夫
◎夕山《長詩》　甲之
◎墓掃除《長詩》　八風

時報

◎羽村求道會の消息◎安中佛敎青年會涅槃會◎求道學舍第二求道會講話題

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會
（九段坂佛敎倶樂部）

毎月二日午後六時
第三求道會
（日本橋蠣殼町說敎所）

求道　第參卷第貳號

信仰の中心

近時信仰問題が盛になりて、獲信の人も少からぬは最も喜ぶべきことである、吾人は常に主張する如く信仰といふは內心の革命である、故に信仰に入るときは世界の光景が一變して自ら驚くばかりの境界に住するものである、即ち從來煩悶苦惱、見るもの、聞くもの、人の爲す所、我行ふ所、一として滿足を見出すことの出來なんだが、俄かに何を見ても聞ても、人も我も喜を以て溢るゝ樣になるのである、そこで此根本的變化は內心の革命とても言はなければ言ひあらはすことが出來ぬ。

其所で吾人が大に注意すべきことは此時直ちに此信仰の中心を見出すことである、全体求道者が煩悶の極に陷りて信仰に入りたるときは唯何となく嬉しさばかりで何とも仕て見よふがなきものゆゑ直に其信仰の中心に向て眼を注ぐことを忘れて、自己自身を中心として考へるやうになる、即ち天地に溢るゝばかりの喜は全体何れより來りたるか、又此歡喜は何を中心として起り來りたるかを氣付けることが肝要である。

信仰の中心は佛陀である、又信仰の淵源も佛陀である、佛陀は必しも眼で見るのでもない、耳で聞くのでもない、信仰に入りた一念に決して疑ふことが出來ぬやうになる、これが信仰の中心である、そして、今が今まで苦しみつゝあつたものが自ら計はずして忽ち此の如き安慰を得たるは如何なる故なるか、是全く佛陀より賜はりたるものである、吾人は早く此佛陀に氣付きて之を感謝し、又之を中心として世界のすべてを考へねばならぬ。

然るに信仰上常に陷り安き弊害は天地に溢るゝ大歡喜に接したるとき、直ちに佛陀を忘れて、歡喜自身を恃とすることである、しかるに歡喜の情は必しも常に間斷なく繼續するものではない、一般に信仰に入りたるときは、從來の煩悶苦惱の極端たりし反動として又常規を逸する程の歡喜の狀態を呈するものである、されど年時を經るに隨うて頗る沈靜の狀態に歸るものである、しかるに歡喜夫自身を恃とするときは、自己自身を中心とするものゆゑに、自身が喜ばれぬやうになつたから、信仰がなきやうになつたのではないかと自己を疑

ひ、少くとも信仰が退歩したのではないかと信仰を疑ひ、其疑ふ結果として是非もとのやうな狀態になりたいと思ふて力味心を生ずるやうになる。そこで力味のあるだけます〳〵不安の念が生ずるやうになつて却て歡喜を生せぬやうになる。

信仰に入つたとき直ちに心からよく解るは佛陀である、夫を信仰の中心として早く氣付かねばならぬ、踴躍歡喜せる我自身を恃とせずして我自身をして踴躍歡喜せしめたまひし佛陀を恃とせねばならぬ、若し此佛陀を忘るゝときは、一旦喜はれた信仰も恰も自己の力を以て開き來つたやうに考ふるやうになる、自己の力で開き來たと考ふる故に、他人に向ても、又自分自身も自己の力で喜ばんと試みる故に、一旦喜ばれた程に喜ばれぬ、然るに此喜たるや自己が作り來りたるものでなくて、佛陀より賜はりたるものなることを自覺するときは、唯〻佛陀に感謝するより外はない、人力にて喜ばんと試みて喜ばれるものではない、喜ばれずとも佛陀を仰げは自然に喜ばれるやうになる、これが他力の極致である。

要するに信仰の中心は佛陀である。

一　仰に彌陀をたのみて、御たすけを決定して、御たすけのありがたさよと、よろこぶこゝろあれば、そのうれしさに、念佛まふすばかりなり。すなはち佛恩報謝なり。

信後の修養

修養といふ言は頗る誤解に陷り安き言語である、若し信仰なくして單に修養とのみ言ふときは頗る危きことである、何んとなれば一般に修養といへることは、吾人が自己の心を矯めて或教訓の如く實行せんと試みることである、こは信仰に入るべき經過として必ず過ぐべき道行ではあるが、人生の上に於て安全なる地位に達したものとは言へぬ、何んとなれば、そは強て我心を矯めて教訓に從はしめたるものなれば何時我心の儘に立戻るかも知れぬ、頗る危險の狀態である。

信仰と云ふことは猶一歩進んだ狀態である、遂に吾人が自己の力では中々行ふことが出來ぬことを自覺して、全く佛陀の力によつたときが即ち信仰である、既に佛陀を見出したるときは之を滅却し去らんとするも取去ることは出來ぬものである、未だ信仰に入らざる前は如何程佛陀々々と念じても、如何程佛陀を理想として居つても、人生の怒濤狂瀾がさかまき來るときは先つ第一に消え去るものは佛陀である、何んとなれば、如何に念するも理想とするも、皆我心中に於て假想假定したる佛陀である故に、平和なときは想像することが出

來るが、大騷動の時は滅却し去るのである。

然るに眞實の信仰なるものは一たび心中に獲得したるときは之を滅却しやうと試みるも滅却することは出來ぬものである、金剛の信といふ言語は如何にも其味があらはされてある、何んとなれば其時の佛陀は我が假定した佛陀でなくて、疑はんとしても疑ふことの出來ぬものである、故に若し人生の狂瀾怒濤に出逢ふた時に如何に苦しくとも、如何に凄じくとも、佛陀は其中に滅却することの出來ぬ力となる、實に眞實の信仰と否とを區別する唯一の試金石は實に此一點である、如何に美はしく見えても眞逆の時に最先きに消去るならば眞實の信仰ではない、如何に微弱でも眞逆の時に人生激浪の中に、たとひ水に蔽はれても最後まで儼存して居るのが眞實の信仰の證據である。

そこで信後の修養といふことは實際問題に出遇ふたときに此佛陀の力を恃とすることである、此佛陀に信賴して徐ろに佛陀の御計ひに任せることである、さりながら人生の激浪の烈しきときは中々自分の力を以て計ふておくことは出來るものではない、唯靜かに佛陀の御はからひを待つだけが容易の事ではない、其佛陀の御はからひを待つには如何樣にしても佛陀夫自身が牢乎として拔くことの出來ぬものでなくてはならぬ、而して眞實の信仰であるときは佛陀は如何にしても去らぬものである、萬尋の海中より生へ拔きたる岩石の如く動かすことの出來ぬものである、此佛陀に凭りかゝつて居るときは如何な狂瀾怒濤も運び去ることは出來ぬのである、これが信後修養の要所である。

かく言へば其佛陀を堅く握りて離さぬことは頗る力味心のあるやうに考へらるゝが、其處が信仰の味であるゆゑ格段異つた所である、此の如き場所にも、とても〳〵離すことの出來ぬが信仰の力である、即ち激浪中に佛陀といふ信念が牢乎として拔くべからざるのみならず、佛陀の信念があれば如何に人生の浪が激しくとも之を握りて離すことの出來ぬが實に不思議である、たとひ佛陀の信念があつても夫が人生夫自身の力とならずして、心中に唯存在して居るといふならば、そは頗る怪しむべきことである、吾人は此心持を形容して言へは握つて離さぬと言ふよりも如何にしても離すとの出來ぬといふ狀態である、稱して執持といふは如何にも適切である、之を釋して執の言は心堅牢にして移轉せざるに名く、持の言は不散不失に名くと言はれたるは實に實驗の文字である。

かくの如く心堅牢不移轉不散不失のものならば、人生の激浪か來るも何の苦もなきもの、如く考へらるゝかもしれぬ、こは大なる誤である、勿論時として存外心安く人生の激浪が自然に解決し去ることもあるが、中々左樣ばかりてはなく、寧ろ激浪が大にして恰も其信する所と反對に寄せ來ることがある、其時は信念が強きだけ夫だけ人生の波濤が強く打當るのである、此に於て信後の修養といへる文字が大に適切である、吾人は此時苦痛を感することは明らかな事實である、たとひ苦しくとも信することを捨てられぬゆゑ此に修養が出來るのである、古の聖賢が其信する事の爲に殉するに至つたのは即此點である、若し此殉教を以て何の苦痛もないと云ふならば、そは古聖賢を理解せぬものである、古聖賢の心を明晰に描かば此の如くであろう、曰く、殉教如何に苦しとするも其信する佛陀を捨つる苦痛よりは容易なものである、否其信する佛陀は捨つることが出來ぬのである。

之を要するに信仰の中心たる佛陀を執持して人生と戰ふのが信後の修養である。

一　同じく、仰に、まことに一人なりとも、信をとるべきならば身を捨てよ、それはすたらぬと仰せられ候。

自ら計ふ勿れ

信後修養上最も戒むべきことは自ら計ふことである、即ち佛陀を信じて之を執持するまではよいが、猶進みて自己の計ひを以て人生の波濤を切り開かんと試みるやうになる、是即自力のはからひである、甚しきに至りては自己が獲信の時、得たる心的狀態を把持せんがため種々の方法を試みることがある、是は悉皆無效である、他力で得た信仰を自力で修養せんと試みるものである、他力の信仰にては信後の修養までが他力である、即ち佛を信ずるために、止むを得ず佛陀を離すことが出來ぬ、離さぬゆゑに人生の激浪と戰はねばならぬ、戰ふと言へばとて決して自分の計ひで戰ふのではなく、佛陀を信ずれば自然に戰ふやうになり、其間に自然法爾に佛陀の力が人生の上に實現し來る次第である、此所に至れば佛陀の力が吾人の上に現實に活動し來るものである、これが信後修養上最も力ある點である。

然るに一旦信仰の光を認めながら、其信仰夫自身を力とせずして、寧ろ信仰を說明し信仰を解剖し、信仰の心狀を作り出して之に安んぜんと試みることがある、こは自己の計ひに

して頗る戒むべきことである、吾人は佛陀を中心とし信仰を力とするの外に何等の計ひも無效である、若し此計ひを以て信仰を說明するときは之を聞く人は信仰夫自身を賴まずして、却て計ひの說明をきゝて之を信ぜんと試みる樣になる、故に眞實の信仰には入らずして却て自己の計ひ夫自身に執着するやうになる、是最も戒むべきことである、吾人は唯佛を信じ、佛に任せ、佛にたよるときは自然法爾必ず往くべきの所、達すべきの所に到着するものである、此に至りて何人も佛陀の御計ひを疑はんとするも疑ふことは出來ぬやうになる。

一　仰に、ときゝ懈怠することあるとも、往生すまじきかと、うたがひなげくことあるものあるべし。しかれども、もはや彌陀如來を、ひとたびたのみまいらせて、往生決定ののちなれば、懈怠おほくなることのあさましや。かゝる懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり、ありがたやゝとよろこぶこゝろを、他力大行の催促なりとまふすと、おほせられさふらふなり。『蓮如上人御一代聞書』

感謝

如來回向

信仰は佛陀の吾人に與へたまふ所、人の信仰に入るや、殆むど人力を以て思議すべからず、我人に與へんと欲するも與ふべからず、人我に求めて必ずしも求めらるゝに非ず、眞個に是れ如來の御催なるもの、若し佛陀の加被力あるにあらずんば一遍の念佛をも稱ふべからず、佛陀の廣慧によるにあらずんば信樂開發するに由なし、皆是佛智不思議の吾人の上に實現したまふ所に非ざるはなし、宜なる哉親鸞聖人信心を以て佛陀大悲の回向也と斷言し、回向を以て一宗を開闡したまふこと、敎行信證開卷に曰く謹て淨土眞宗を案ずるに二種の回向あり、一には往相二には還相と、嗚呼何事も如來の回向なる哉。

聖人の消息

聖人の傳道は、たしかに此佛力を日夜拜したまふ生ける事

實也、聖人を敵視したる明法房辨圓が改悔懺悔したるも如來の御はからひ也、聖人の實子慈信坊善鸞の自ら誤り人を誤らするも佛天の御はからひ也、聖人自筆の消息は生ける信念の披瀝也、曰く、

何事よりも明法の御房の往生の本意をとげておはしまし候こそ常陸國うちのこれにこゝろざしおはします人々の御ために、めでたきことにて候へ、往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにても候はず、めでたき智者もはからふべきことにも候はず、大小の聖人だにも、ともかくもはからはで、たゞ願力にまかせてこそ、れはしますことにて候へ、ましておの〳〵のやうにおはします人々は、たゞこのちかひありときゝ、南無阿彌陀佛にあひまひらせんことありがたくめでたくさふらふ御果報にて候なれ、とかくはからはせたまふこと、ゆめ〳〵候べからず、(乃至)明法房なんどの往生しておはしますも、もとは不可思議のひがごとをおもひなんどしたるこゝろをも、ひるがへしなんとしてこそ候しか、

又曰く、

このところに念佛のひろまりさふらはんことも佛天の御はからひにてさふらふべし、慈信坊かやう〳〵にまふしさふらうなるによりて、ひと〳〵も御こゝろとものやう〳〵にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ、かへす〳〵不便のことにさふらふ、ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせさせたまふへし、そのところの緣つきておはしましさふらはゝ、いづれのところにてもうつらせたまひさふらふておはしますやうに御はからひさふらふべし

歎異鈔と末燈鈔

聖人の一言一句は皆信仰の源泉也、而して聖人の御一流は皆之に汲めるもの、同一信心の水なりと雖、其源泉と其末流と之を味ふに言ふべからざる區別あり、歎異鈔の如きは聖人に親炙して面授口決直ちに瀉瓶繼承せるもの、且つ其文字簡潔にして力ある、直截にして明了なる、實に求道者の秘鍵なり、しかも聖人直筆の消息末燈鈔を拜見するに質樸飾なく、文理朦朧として一見了解し難き所に、無量の信念溢れつゝあるを認めずんはあらず、蓋し是れ源泉と河流との區別たらずんはあらず、何んとなれば聖人の文字は一字一句皆信念の結晶なれば也、吾人は世人のあまり氣附かざる左の文字を並べ

擧げんかな、歎異鈔に曰く、

念佛は行者のために非行非善なり、わがはからひにて行ずるにあらざれは非行といふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ、ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに行者のためには非行非善なりと云云

末燈鈔に曰く

寶號經にのたまはく、彌陀の本願は行にあらず、善にあらず、たゞ佛名をたもつなり、名號はこれ善なり、行なり、行といふは善をするにつきていふことはなり、本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには善にあらず、行にあらざるなり、かるがゆへに他力とはまふすなり、

實に聖人は如來本願の權化也、蓮如上人常に如來聖人を並へ呼びたまふもの良に以なきにあらざる也。

無上の慰藉

雨窓跪坐して聖人の遺書を拜讀す、天下無上の慰藉也、聖人の筆は唯自己信念の儘を描く也、如何にして之を人に敎へんかと云へる念慮だになし、是所謂全く私なき者、無爲自然の間に絶對の感化を蒙る、而して聖人の筆にあらはるゝ信念は吾人凡夫の胸臆を直寫せるもの、一一の文字無限の同情と無上の慰藉とを運び來る。

講話と告白

吾人人生上の問題の爲に苦しめることあり、而して講話の席に臨みて二三言を肇む、心中廓然として忽ち別天地に遊ふの感あり、吾人胸中昏々として活路を發見し得ざることあり、恰も求道者自身來訪して其信念を告白し、書信を以て大歡喜の實驗を報し來る、一見一讀忽ち大悲の光明を仰く、若し此講話と告白となかりせば吾人日常の生活如何に暗澹たらんか、蓋し是れ佛陀の吾人に與へたまふ無上の恩寵也。

常行大悲

吾人は如來の大悲を讃嘆し奉るときに、聽く人亦如來大悲の恩德を感謝し奉る、如來の大悲は吾人の胸に溢れて亦人の胸に注ぐ、實に大悲の靈泉は世界到る處に充滿せざるはなし、嗚呼吾人何等の幸か、知らず識らずの間常に如來の大悲を行し奉る、而して是れ毫も自分の計ひより來るに非す、一一皆如來大悲の御計ひより來らざるはなし、故に說くもの心を用

ゐずして聞くもの自然法爾として心蓮開發し來ることあり、片言隻語猶踊躍歡喜の頂に到らしむ、之を稱して佛智不思議と言はずして何とか言はん噫。

報恩謝德

親鸞は父母孝養のために念佛一遍だにも申したること候はずと、是自力回向の念佛を嫌へるなり、然れども信後の經營何事も報恩謝德の爲ならざるはなし、既に稱して報恩謝德といふ、苟も我を育し、我を護持する國家、社會、民衆の爲め、何ぞ如來大悲の矜哀を仰がざるべき、聖人曰く、

念佛申さん人々はわが御身の料はおぼしめさすとも朝家の御ため、國民のために念佛をまふしあはせさふらはゝ、めてたくさふらふへし、往生を不定におぼしめさん人はまつわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらうへし、わか御身の往生一定とおぼしめさん人は佛の御恩をれぼしめさんに御報恩のために御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとれぼしめすへしとそれぼえさふらふ、よく〳〵御案さふらふへし、このほかは別の御はからひあるへしとはれほにずさふらふ、

講話

招喚の聲

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日の題は「招喚の聲」であります。茲に御集りの諸君の中にも澤山有らうと思ひますが、近時一般に求道の機運が非常に盛になつて來た。其熱心非常なもので、我れ若し道を獲すば生きてる事が出來ぬと謂ふ人が多い。信仰は此方の熱心に求むる力で得られるものでは無いが、私は其の切なる熱心に對し是非安心なさらなければならぬと望む次第です。

夫に就て今の話の方面より言ひますに、既に諸君は斯く切實に求めてゐ出になる、併し其求むるといふ點よりも更に注意すべきは、吾が求めた力で求め出す信仰では無いといふ點であります。我は熱心に求めて居ると思て居ても、其求むるのは無より我々が求め出すのでは無い。佛陀より言ふ時は諸君が斯く求められるづつと昔より、既に非常の力を以て諸君が今求むる如く佛陀より我々の方に求めてれ出下さつたのである。併し自分が求めて居る間は夫に氣が就かぬ、氣が就かぬ故に此の佛陀の大慈悲が頂け無いのです。例へば人ありて

他人の爲に色々善く考へ非常の同情を寄せて居る。然るに相手は之を思はずに、唯自分の惡い事を謝つたり願つたり計りせられると、其人は殆ど言ひ樣も無い、自分の心は全く屈か無いのである。世には唯自己の罪惡觀のみに陷つて、謝つたり願つたり計りして居て少しも心の安らぬ人がある、而して一方は決してそんなに惡く思つて居無い、却て其人が斯くの如く苦む丈け一層深く同情を寄せて居る。此方は唯謝つて相手の同情を得やうとのみ勉めて居る、實は與へらるべき物は既に自分の上に與へられてあるのであるが、夫を此方から求めて得やうと思てる故、先方の親切が何うしても受けられぬのです。茲の處は現今殊に注意を要し、又實に信仰の開け來る要所です。

此點に來ると親鸞聖人の言葉が如何にも難有い。偖て其の御言葉は何かと言ふに、諸君も常に口にせらるゝ彼の南無阿彌陀佛です。他力信仰の中心は實に南無阿彌陀佛で、之を平易にすれば、南無は即佛に歸依する意味です。又英語では隱家を見出す意味となり、漢字では所謂歸命で、即ち阿彌陀佛に歸命すると謂ふのが南無阿彌陀佛です。通常言ふ所では阿彌陀佛に歸命する、又は阿彌陀佛に命を歸する、或は賴むとも言ふ、兎に角にも佛陀に依り懸る事我を任かせて仕舞ふ事です。元來佛敎本來の形が三寶歸命なので、即ち佛法僧の三寶に身を托すると謂ふが佛敎本來の意味である、即ち歸依佛、歸依法、歸依僧である。夫が段々著しくなるに就け佛、殊に根本阿彌陀佛に歸命すると謂ふ事になり、特に南無阿彌陀佛が出來たのであります。處が僅々六字の南無阿彌陀佛である

が少しの意味の取方で方向の上に非常な區別が出來て來る。普通「據る」「賴む」「すがる」の意味であると謂ふより押すと、蓮如上人の後生助け給へてずつと解釋する事も出來る、蓮如上人の後生助け給へは切實で能く南無阿彌陀佛に叶つてある如くにもある。併し此等の原語の事は實は私も能く存じませぬので、今日は唯之に就て度々言ふ所の親鸞聖人の信仰の說きやうの一風異つた處を申し度いと思ふのです。

親鸞聖人の『行の卷』には、此の『行の卷』は法然聖人の勸め給ふ南無阿彌陀佛の不思議を現はされたものであります。其の『行の卷』中には何とあるかと言ふに、善導大師の文を引いて南無阿彌陀佛を次の如くに言つてあります。

然れば南無の言は歸命なり。歸の言は至なり、また歸說なり。說の字は悅の音、また歸說なり。悅の字は稅の音、悅稅ふたつの音告なり、述なり、人の心をのべのぶるなり。命の言は業なり、招引なり、使なり、敎なり、道なり、信なり、計なり、召なり。こゝを以て歸命は本願招喚の勅命なり。

一寸聞くと甚だ無理な言ひ方である、歸の字をよろこびと言ひ、人の心をのべのぶると言ひ、又命の字を招き、敎え云云と言ふは隨分無理の讀方のやうである。が之は何うかと謂ふに佛の方よりの呼聲だといふ解釋です。此の解釋は歸命の文字から見れば實は無理なので、歸命の元來の意味は此方からよりかゝるが本意なのである。處が聖人は夫を轉じて佛陀より我々に呼懸けて下さる聲だとして本願招喚の勅命也とせられたのです。聖人の當時に於ては惠心流と謂つて訓の附け方な

どは勝手になし、唯自分の意を言ひ表はし得る如く讀むといふ一種の流義があつた相です。聖人の讀方の破格なのは、或は當時の一風と見ても善ろしい。今我々の味ふべきは其文字解釋の一風では無くて聖人が斯く普通の讀方と違へて迄讀んである其聖人の信心を味へば外に用は無い、其味が即ち問題なのであります。

自分より佛を頼む、即ち諸君が求められると云ふ點を先きにすれば、歸命は法を求むる、信仰を求めると謂ふ考になる。併し聖人より言ふ時は、人々はさう言ふが夫では甚だ遲い、我が求めて安心するでは無くて、歸命は本願招喚の勅命である、佛陀の救濟の御呼聲だと解せられたのです。我々は自分が佛に向ふと言ふが、實は我々が向つてから御慈悲が來るのでは無い、曠劫の昔より佛は我々の爲めに非常の慈悲、苦勞、心配を爲し、我々を導いて永久に親切を爲て居て下されたのである、夫が本願招喚の勅命であつたのです。私も嘗ては親鸞聖人が實に廻はり遠い事を言はれる、そんなにしなくつても善いて無いかと思つて居ました。諸君は現に佛陀に向つて、殆んど生死迄切りつめて求めて御出になるに係はらず安心か來無い、求むる心で安心しやうとせらるゝから出來無いのです。佛陀は既に永久の昔より我々の上に其大慈悲を注ぎかけ居て下さるのである。其の御慈悲にハツト氣が就けば、自分は唯今迄信仰を得やう、信仰を以て行かうと思て居たに、豈計んや佛陀は既に昔より我々の爲めに絶對の慈悲を與へて居て下された、空氣の昔より存する如く、日光の昔より我々を照らせる如く佛の慈悲は昔より我が頭上に注ぎ懸けられてあつた、成程求むるので無い、之をお受けする外は無いと頂かれて來るのです。凡て親鸞聖人の一代の事業は積極的に此の慈悲を顯はし給ふたのであります。安心が出來ぬで求められるは既に佛陀に向うて居るので大に宜敷いが、其の求むる慈悲は昔より與へられてあるのであります。

偖て今の御文は善導大師の

南無と言は即ち是れ歸命なり。亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其行なり。此義を以ての故に必ず往生を得。

とあるより來たのである。即ち善導大師で言ふ時は、歸命は我々が佛陀に歸命する事となり、阿彌陀佛は我々が何物をも自分の物に爲さずして人に廻向して行く其の行爲となるのです。處が聖人は又之を全く逆さまにして、初めの文に直ぐ引き續き

發願廻向といふは如來すでに發願して、衆生の行を廻施し給ふの心なり。即是其行といふは即ち選釋本願これなり。必得往生と言ふは、不退の位に至る事をうることを顯はす。

と仰せられてある、丸て正反對に成つて居るのです。聖人の御意では我れが廻向しやうとて出來るものか、出來る氣で居るが、行者の方よりは全く不廻向ぢや、人間の根底には廻向の心など露程も無いだらう、我々は何事かすると直ぐ交換の氣持を持つて居る、例へ善事を爲して自ら喜ぶにしても、其の裏面には名譽を求むる心が忽ち頭を擡げて居るのだ、不措身命など、とても人間の出來る事で無い、——古人は凡夫を

解釋して「愛妻愛子を凡と言ひ、措身措命を夫と言ふ」とも曰うてあります——其の樣の者が廻向が出來るか、廻向とは人間の爲る事では無くて佛より我々の上に回旋して下さるのだ、我々は眞に一善無き者である、夫故佛陀は爲る事爲す事皆衆生に回旋して下さるのだ、發願とは佛陀が四拾八願を起して衆生に與へて下さる事ぢや、と言ふのです。茲が甚だ肝要の點である、願だ行だと力を入れると譯の解らぬやうになるが、此の大慈悲の境界に向つて見れば、南無と言ふは佛の我々を呼びかけ給ふ聲、阿彌陀佛とは佛陀の惠を受くるといふ事、即ち佛より絶對の力で御與へ下さるゝ事が南无阿彌陀佛の六字であります。故に全然如來御廻向であります。

話が大分敎理風になつて、れ解かり難い方も有るかも知れませぬが、猶ほ少し詳しく申度い。己上話した如くで、即ち佛陀の我々を助け給ふ慈悲の呼聲が南無阿彌陀佛の誠です。更に進むて申せば、至心信樂欲生の三信も亦同じ事なのである。之は既に幾度も申た筈であるが、此の三信は矢張り本來は我々が佛に對する信仰の態度にあるのです。夫を聖人は又例の筆法で佛陀より我々に賜はるものとせられた、即ち南無は我々を助け給ふ不思議の叫び聲で、其のまことが至心だとするのです。之は甚だ緊要の處で、全体我々が自分にまことにする事が出來、又人にまことを求めて得るならば何も佛陀のまことを受る必要は無いのである。けれども聖人の信仰では我々には無始より己來一寸のまことも無いのです。近頃は人生上、求道上苦まれる人が實に多い、私は其の苦悶の結局、遂に自分ではまことに爲る事が出來ぬといふ點に至りて初めて道が開くる事と思ひます。聖人は『信卷』に於て我々の本質を遺憾なく示された、曰く

一切の群生海無始よりこのかた乃至今日今時に至る迄、穢惡汚染にして淸淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心なし、

と。聖人は如何なる賢人聖人でも、我に淸淨眞實があるとは言へぬと斷言せられるです。隨分ひどい語のやうであるが結局の處は遂に茲に來る、自らまことて佛に向はうとして如何程苦心してもどうしても成り立たぬ、唯佛陀より廣大の力を以て我々の上に絶對の同情を加へて下さる、夫か眞實の體なのです。聖人は「信卷」に於て至心のまことを釋して

至心は即ち是れ至德の尊號を其体とせるなり。

と言はれた、慈悲の塊南無阿彌陀佛がまことの体なのです。

次に信樂と謂ふは信じ愛する事である。是れ又我々に佛を信じ愛する事が出來るかと言ふに、とても出來ぬ、歡喜する事も出來ぬのです。然らば何うかと言ふに、聖人は亦信樂を釋して

然るに無始よりこのかた一切の群生海無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて淸淨の信樂なし、法爾として眞實の信樂なし、茲を以て無上の功德値遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし、一切凡小一切時中に貪愛の心常によく善心をけがし、瞋憎の心つねによく法財をやく、急作急修して頭燃を拂ふが如くすれどもすべて雜毒雜修の善と名く、亦虛假諂僞の行と名く、眞實の業と名けざるなり、此の虛假雜毒の善を以て無量光明土

に生ぜんと欲する是れ必ず不可也。

と爲て仕舞はれた、如何にも難有い文です。聖人の御意では、如斯き我々に信樂の心があるか、佛を信じ人を信ずるなどとは口にすらも言へぬのだと言ひ切らるゝのです。然らば如何にすべきかと言ふに聖人は亦

信樂と言ふは如來の滿足大悲圓融無碍の信心海なり。

と、佛の大慈悲を以て、佛に背く我々に佛より與へて下さるが信樂だとせられました。

實例を以て話して行けば每に言ふ囚人の上である。囚人の人達の中には既に五犯六犯と重ねて居るに係はらず、尙ほ自らゐらい積りて居る人が多い。夫等の人々は、何でも今度出獄したらば大にやり度い、日夜に强勉して從來の失敗を取返し度いと思ひ、やれば何事でも出來るやうに考へて居る。實は初め父母の家に居つてさへ出來無かつた者が、後になつて出來る筈は無いのであるが、夫等の人々は猶ほ出たらば〳〵と思つて居るのです。其の甚しきに至つては、自分の生活が立つやうに成つたら信仰を求めやう、立派に暮せるやうになつたら說敎でも聽いてと思ひて居る人さへある、之等の人々には信仰は第二にも第三にもなつて居る。自分の力が未だ全然見きはめられて居無い、信樂が自分にある如く思うて居るのです。

併し諸君が今道を求められる上にも、或は之と違はぬ邊があるまいか、我は何でも信仰を得て目を醒まさう、信仰を得て人を善く爲度い抔と、一點でも自分で何か出來る如く思つ居る間は、此等の囚人と選む處は無いのです。此等囚人の人々がいつでも信仰に入るは何でかと言ふに、外では無い、一昨日も次の實例が起りました。之は隨分質の惡い犯罪をやつた男であるが、昨年から何でも心を改めやうと頻に苦心を爲て居たのです。けれ共他から貴樣は可かぬと一言いはれると、もう不快の思が抑へられぬ、其中に或る書物を見た。處が其中に愚人は飯杓の如き者で、杓子は如何なる好味に接しても、其味を保つ事が無い、愚人は如何なる立派な敎を聞いても之に感ずる事が無いといふ意味が書いて有つた。此男は之を見てから成程自分は之だと思ひ彌々其愚を悲み泣いて居る、眼の着き所が余程面白いです。猶ほ此間

無明長夜の燈炬なり、　智眼くらしと悲むな、
生死大海の船筏なり、　罪障をもしと歎かざれ、

の和讃で信仰に入られた女の方の事を聞かせた。すると其男には唯智眼暗しといふ丈か聞こえて「實に私は智慧が無いのです、如何程善く成らうと思つても、智慧が無いから善く成る事が出來ぬのです」と又悲んで居る。私は又「イヤそうぢや無い、今の和讃には何とあるか、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしと悲むな、とあるではなか。我々は無始已來無明長夜に沈淪して居るのであるが、佛は其無明長夜を照らして下さるともしびだとあるではないか。お前が夫程迄に自分を悲むのも私から見れば佛の御力だ、併し我々は自分を如何程善く爲たくても善く爲る事はとても出來ぬ、故に佛陀が大慈悲を以て我々を助けて下さるのぢや。れ前が熱心に求むるのは善いが、實は佛陀のお意に背いて居る、お前は佛陀の親切を見ずに、唯自分の上のみ泣いて居る、佛陀が大悲を以て我々を

見て居て下さるのを見ずに、自分一人で何うかしてと思て居る、甚だ勿体無い事である」と話して來ました。又私はいつても監獄で嬉しさうに話して居るさうで、囚人等は、すぐに如何してあゝ嬉しさうになれるかしらんと見てしまう。私はいつても「私か喜べばお前等も喜んでよいでないか、」といつてくる。我々は自分で勉めて、喜ばうとしてもろれは出來ぬ。我々は自分から喜ぶのではない、自分から信じて喜ばふとするのは自力です。信ぜねばならんと力めば、信ずることは出來ぬ。そうではなくて既に佛陀が大慈悲を以て、我々に向つて居て下さる、佛陀が我々を信じ我々を愛して居て下さる。これが信樂です。故に信仰上信樂の味は有りがたい。けれども我々に信樂が出來るのではない、佛陀が我々を信じ愛して居て下さればこそ、我々に信樂が得られるのです。至心のまことも我々にあるのではなく、佛陀がまことを以てむかふて下さる故に我々に出來ぬまことともいつしか內心に起つてくるのです。

第三に欲生は我々が極樂に生れようとする廻向心である。處が聖人は又

欲生といふは、即ちこれ如來諸有の群生を招喚したまふ勅命なり。即ち眞實の信樂を以て欲生の体とする也、まことにこれ大小凡聖定散自力の廻向に非ず、かるが故に不廻向と名づくる也。然るに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂沒して信實の廻向心なし、淸淨の廻向心なし、この故に如來一切苦惱の群生海を矜哀して菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も廻向心を主として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに、利他信實の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり。欲生即ちこれ廻向心也。これ即ち大悲心なるがゆゑに疑蓋交はふる事無し」

と云つて人にむかつて同情するにも、內心勝他の心を斷ち切ることの出來ぬ人間には到底眞實の廻向心等は起らぬ、故に我々凡夫の方では、不廻向だと仰せられました。即ち廻向心は佛よりの廻向である、佛陀が我々の苦を見て、與へて下さるが廻向心である。それ故に欲生は佛陀が我々に極樂に生れんと欲へよとの御呼聲だとせられたのです。是れは少々廻り遠くなりましたが親鸞聖人が信仰の極を云ひ顯はされた言語は總て佛より我々に向ひたまふ樣になつてあることを申したのです。

扨て南無といふは佛の呼聲である。其まことは我々を信じ愛して下さる信樂である、このまことは廻向といふ斗漏の口から我々の上に注がれるのです。こゝが今日の題の意味であります。

夫故諸君が信仰を求められる上についても諸君が自ら勉めたり、實行しようとしたり種々悶がかれる事によりて來る信仰でない、けれども我々が、かくのごとき躰度に至つたとが既にほの〳〵と光明に照らされて居る容です。であるからたゞ安心する時は、たゞ此の我々の上に注がれたる慈悲を味はひ喜こべばよろしい。此方から何んとかして信ずるのではない、五犯十犯と犯罪を重ね人を怨み疑つて居る其人間も即刻信仰に入ることも出來るのです「あゝ、ありがたい監獄へ入つたも皆佛の力である」と一念歡喜する人には如何にして罪を消すとか消さぬとか、そんなことは問題にはならぬ、即刻

感するときは丁度目がさめたようなものであります、信仰は全く佛の賜物で、ああ有り難いと感ずる時が即ち慈悲の屆きたる時である。故に信仰は偶然道で物を捨ふがごときものである。聖人はたゞむづと喜へよと仰せられた。喜ぶとはこの我々の上に注がれたる慈悲を喜ぶのです。

これは御存じの人もあるかもしれぬが、勅命といふ話のもとは善導大師の二河白道の譬喩より來たのです。人あつて曠野に迷ひ、前には群賊、後には惡獸の襲來を受けた。行くべき方とてはない、一方に逃れんとすれば、火の河、水の河である、たゞ其間に四五寸の白道があるのみである。此時後の方に人あつて其道を行けといひ、前の方西岸上よりは其人を呼んで曰はく「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を守らん、水火の二河に墮せんことを怖れざれ」と。招喚の呼聲といふはこれから來たのです。

其人即ち其呼聲を力にして進まふとすると、又後方より異學異見別解別行の族が呼びかへす。此人これらの聲に耳をかさずに眞一文字に進み、遂に彼岸について喜んだとある。即ち我々内心には貪瞋煩惱の波高く異學異見の人等は種々と迷はしに來る、たゞ、こゝに一條の活路がある、而して後よりは行けといひ、前よりは直ちに來れと呼ぶ人がある、其呼聲は即ち佛陀の慈悲であります。親鸞聖人の宗旨は阿彌陀佛の本願の呼聲の宗旨、佛廻向の宗旨です、我々の目を着くべき點は、此處にあるのです。

處が其呼聲を空な聲、或は遠方に聞こゆる聲の如くに思ふて居ては大なる間違です。長者窮子の譬では、長者の寶は、たゞ迷子にやる斗りに積んである、貰へばいつでも與へられて居るたゞ、此方がうけさへすればよい樣になつて居るのです。親の慈悲は常に平等で子供が惡人だからとて何の變りもない、たゞ小供が知らぬものゆゑに與ふることが出來ぬ、子が寄りつかぬもの故に渡すことが出來ぬのである。親は昔より我々の行くことを待つて居てくれる。我々は親に向はずに逃げて居る、故に信仰を得ることが出來ぬのです、信仰を得たからとて何も人間がえらくなる譯ではない。たゞ廣大の慈悲の中心に接し奉つたといふだけの事實です、然しながら此事實が實に大きいです。これまでは例へば嘗て云ふた靴直しの囚人の如く何程仕事を充分にやらうとしても出來ぬが、今喜こび〳〵一針づゝ縫つて行く間には計らはねども自然に確かなものが出來る樣になる。自ら一點の欠點なきものを作らふとしても我力にては出來ぬ、出來る位なら佛陀は入らぬのである。佛陀が入らぬのなら佛敎は入らぬのです。

同じ佛敎でも釋尊のなされた如くして行かうとするのなら自力聖道門の敎で我々には出來難いが、聖人の敎へたまふ處はそこでない。現に我々が昔より自ら知らずして佛の御哀れみを蒙つて居る、此事實が佛陀の居て下さる事實であり、又佛陀があるといふことが即ち我々の慈愛を受けて居ることである。我々は此の慈悲に甘へ、この光明に包まれて安心して生活をさせてもらふことが信仰の味であります。信後と雖も人間が俄かに變るてはない、「有漏の穢身は變らねど、心は淨土にすみ遊ぶ」の和讃の如くである。諸君は既に不思議にも熱心に求めなさるのである、私は又遠からずして此の不思議の力

で諸君が絶對の信仰に安住せらるゝことゝ信じます。自分に求めて居る間は、分らぬが、氣付いてみれば、昔よりの御守りである。彌陀の五劫思惟の御苦勞を案ずるに、ひとへに親鸞一人が爲めなりけり」であります。我々が餘義なくして求むる心になつたも信仰の上より見れは皆佛の御恩であります。

かく御恩を喜ふ喜は理屈では解からぬ、根本本體の佛陀より自然に喜が湧いて來るのです、佛の慈悲の根本を頂いて疑はんとしても疑ふ事が出來無いのです。此の點になると信仰は心を全く一變すると言つても宜しい、之は佛陀より賜ふ處の心なのです。信樂も歸命も皆佛陀より來る、のみならず日常の生活迄が皆佛陀より來るのです。信後の日常生活は此の信仰の喜の繼續であつて、其處に何等の不安もない。例へ職業は從來の職業であつても意味が一變して來る、佛陀の根底より來る故盡きぬ味が出て、我れと我が手が進む事になるのです。之を佛恩報謝と言はうか、佛より頂いた故自分から報謝すると言ふ時は間違つて來るが、此の廣大の恩德に對して唯難有く報謝せさて貰ふのです。佛より賜はる念佛をア、難有いと口に出せばやがて報謝の大行となつて下さるのです。靴直の囚人にしても今迄はせよと役人が命ずる故しなくてはと思つて爲てたのであるが、今度は靴を縫ふ一針々々に勞働の神聖を自覺して居る次第である。亦東京監獄死刑囚の如き死にさはまつた身でありながら、毎日〳〵仕事を勵んで居る。「私は毎日如斯く食事を頂いて居るのであるから是丈げは私の務めと思つてさせて貰ひます」と自ら言つて居る。如斯く一度佛陀の御慈悲を仰いてからは、口に念佛を稱へ〳〵爲て行く一々の仕事の上に皆大なる價値が出て來る、是皆佛廻向の信仰より價値が出て來るのです。で信後は同じ仕事にしても自發的に樂みとなつて出來るやうになり、こゝろつと意味が一變して來るのです。而して其仕事たるや全く佛より賜はつた者であると解かつて來る。斯くなれば我善を行はん抔との我情があるては無いが何もかも、皆報謝感謝の心から自然に出來るやうになります。然らば信仰以後は何でも彼でも皆佛法〳〵と思つて爲るかと言ふに、夫がそんなに自覺的に勉めて爲るのではありませぬ、ひとりでに自然にさうなるのです。

云ふ迄もなく信仰生活の第一義は常行大悲である、けれども之とて日々の事務を廢して信仰を話せと謂ふのでは無い。信仰の人が信仰を喜び〳〵日常の仕事を爲て居る事が人より見ると常行大悲になるのである、我が勉めて爲るでは無くて、ひとりでに業務の上に行はさせて貰ふのです。勿論私の如く專門に其の話を爲せて貰ふも難有いが、又今言ふ如く色々に喜ばせて貰ふも難有い。信仰の人が政治をすれば其政治が立派なる常行大悲である。自ら大悲を行じやうと勉める時には決して出來ぬが、唯佛の大慈悲を仰て何氣なく喜んで居る間に、人も自然と廣大の力を感じられるやうになる。故に信仰の生活は常に安かて有難い、口に現はれて念佛となり、身に現はれて常行大悲となるのです。然らば信仰後は煩惱が無くなるかと言ふに、否どし〳〵煩惱の集合である。けれども御慈悲に氣就かせて貰ふ其都度に大悲を喜び光明界に出して貰へる、自ら他人に與へやうなど思はずして與へられる事

になるのです、殊に望ましきは諸君が此の信仰の意義を以て、實業、政治等あらゆる社會に立ち、―― 夫は無論相對界の人生に立つた時は人々色々と苦む時もあるけれど――此の大なる御力に據て活動せられん事であります。隨分話が長くなりました。（了）

Ah! Saver! Brother! Guide! Lamp of the Law!
I take my refuge in thy name and thee!
I take my refuge in thy Law of Good!
I take my refuge in thy Order! Om!
The Dew is on the lotus! Rise, Great Sun!
And life my leaf and mix me with the wave.
Om mani padme hum, the Sunrise Comes!
The Dewdrop slips into the shining Sea!

The Light of asia

聖傳

ジヤータカ釋尊傳

二 幼時

抑も未來の佛陀は三度の誕生に於て、母體を出でたまふにのゞみ、直ちに談りたまへり。藥王としての誕生と大施主としての誕生と此度佛陀としての誕生となり。

藥王としての御誕生の時、天使長サッカは君の生れんとする時小さき白檀を彼れの御手におきて去りぬ、君是れを握りて出でたまひしかば、君の母「汝の持つものは何ぞや我子よ」と問ひたまひけるに「こは藥草なり母上よ」と答へたまへり。即ち君は藥を持ちて出でたまひければ、藥兒と名づけられたり。人々藥草を取りて水瓶に挿しおきしに後に藥となりて、盲者、聾者、又何くれの病も悉く癒されたり。「こは驚くべき藥なり、驚ろくべき靈藥なり」との聲は所々に起りぬ。以後君は大醫王と稱へられたり。

次に大施王として誕生したまふや、生れんとする時、右手をさし出して曰く「家に何物かあるや、われは賜物せんに」と、母は「愛子よ汝は富家に生れたり」とて手に彼の手をとりて掌に數多の金を滿たしたる囊をおきたり。

終りに此誕生には、君は勝利の歌を謠ひぬ。かくのごとく

三度の誕生に於て、ひとしく御聲を出したまひしのみか、受胎されたまふや、必す三十二の瑞光あらはれぬ。又我等が菩薩ランビニの園に生れ給ふと同時に、ラフラの母、チャンナといへる侍者、カルダイといふ大臣、カンタカといへる御馬、大なる菩提樹、寶の瓶四個此世に生じぬ。瓶は二マイル四マイル、六マイルと八マイルの大さなりき。これ等はサハジエータ即ち同生の物と呼ばれたり。

兩市の民は菩薩をとりて、カビラバスツに行きぬ。其日テーバチサ天なる天使の群は、驚ろき且つ歡びぬ、彼等は上衣を振り動かしつゝ喜んで曰く、

「カビラバスツに於て王スト*ダナに王子生れたり。かれは菩提樹下に於て佛陀となり、正義の國を見出したまはん。我等は彼の永久の德を見、彼の敎を聽く事能はん、何の喜か是れに過ぎん」と。

隱者これをきゝ速に天使の國より下り、王家に入り、かれの爲に設けられたる座につき、「彼等天使は君に王子生れたりと告げぬ、おゝ王よわれをして見せしめ給へ」とこひければ、王息子を華麗に裝ひて隱者を禮すべく連れ來れと命じぬ。されど未來の佛陀は御足を彼の頭髮の上に置き、敢て禮したまはざりき。宜なり、此御誕生に於ては菩薩に禮せらるべき價値あるものは一人もあらじ、若し是等無智なる者、佛陀の頭を隱者の足下に置くことあらば、必らずや隱者の頭は二つに裂けん。されば隱者彼れの座より立ちて「我の爲に我自身の滅亡を來すべきにあらず」とて菩薩に敬意を表しぬ。王亦この不思議に驚ろき自身の息子を敬したりき。

そもこの隱者は未來四十年過去四十年間の出來事を知る明を有しぬ。されば、菩薩の御身に御榮の相あるを觀て、君は佛陀となりたまふや否やを考へぬ。而して彼は最も確かに佛陀となりたまはんことを前知し微笑して曰く、「こは驚ろくべき兒なり」と。

かくして又おのれ自身は君が佛陀となりたまふを見屆くべき運命あるやとかへりみしに、彼は能はざるをしり「あはれ、我其以前に死して無形の世界に生ずべし、百も千も佛陀人中に現はれ給ふ間、われは彼等佛陀によりて敎へらるゝこと能はじ、又我かゝる驚くべき嬰兒が佛陀となり給ふ時まで長ふる能はざるなり、あゝ實に我が損失は大なり」と嘆じて哭しぬ。人々この樣を見て問ひて曰く、「我等の師は唯今微笑したまひしに今また慟泣したまふ、君よ如何なる不幸か我等の主の小さき君の上に來れるなるか」「否彼に何等の不幸も來れるにはあらず、必らず彼は佛陀となりたまふべし」「しからば君は何故泣きたまふや」「われにゆるされざるべし」と彼はいひぬ、「彼が佛陀となりたまふ時かゝる偉人にまみえんことを、實に大なるかな我損失は、われ自身を悲しみてなく」と。

さはれ、彼はせめて、彼の親族の誰かゞ佛陀として菩薩を見奉るべくゆるされざるやを觀ぜしに、彼は姪ナーラカは其榮を擔ふことをしりぬ。されば直ちに隱者は彼の妹の家に行きいひぬ、「汝の息子ナーラカは何處にか」「家の中に、兄よ」「かれをよべ」とて、ナーラカ傍に來りし時曰く、「ストーダナの家に一人の若き佛陀生れたまへり。三十五歳にして彼は佛陀と爲りたまはん、汝は彼にまみゆべし、されば出家せよ」と。

ナーラカ彼の叔父は理なくして徒らに彼に說くものならざるをしりしかば、無量の富をすてゝ藏より黃なる衣、土器の水瓶を取出し髮を剪り衣を着して曰く、「われは世に於ける最大の靈に發願し奉る」と、地上に平伏し、菩薩のおはす方にむかひ、禮拜すべく組み合せたる手を擧げぬ。やがて彼は托鉢を袋に入れ、そを肩にしてヒマーラヤ山に至り、僧の生活をしたり。而して彼は、如來、全き大覺を成じたりしとき其許に至り救の道を學び又山に歸りて阿羅漢道を成じ、なほ最も優れたる道を修行して七ヶ月の後遂に滅盡三昧を得たりといふ。

偖て、菩薩の生れ給ひしより五日目に菩薩の頭を洗ひ奉り命名式を行なひぬ。臣等王家を四種の香物もて擧らせ、ダルバージアの華もて飾り、乳にてよく料理せし飯を作り、三つの吠陀を習熟せる百八人のブラマンを呼び美食を與へ饗應し、シッターダと名づけ奉りぬ。王は又菩薩の如何なる生涯を送りたまふやを占はしめぬ。かれらの中ラーマ、ダージャ、ラクハナコンチン、コンダンヤ、ボージャ、スヤーマ、スダッタの八人のブラマンありき。彼等は五欲を制し、神通を得たり。

今これらは菩薩を占なひ奉る主なる人にして后の御夢を占なひしも是等の人なりき。彼等の中七人は二本の指を擧げ、順次に占なひて曰く、

「彼は家に止り統一主となりたまはん、もし又誓願を起したまはゝ佛陀となりたまはん」と。

されど他の最もわかきコンダンヤとよべるブラマンは菩薩にいかにも吉兆あるを見奉り、たゞ一本の指を擧げ躊躇することなく

「彼は家に止りたまふ相なし、誠に彼は佛陀となり世界より罪や惡癡の覆をとり拂ふべし」と宣言したり。

この人は前世既に〳〵以前に示現したまひし佛陀のみもとにありて、聖なる發願をなしたれば他の賢こき七人を凌ぎ菩薩はたゞこの一つの生涯をのみ送りたまはんと前知せしなれば、たゞ一本の指をあげ、「かくのごとき人はいかで世俗の生活の中に投げ入れらるべきや」とこそ占なひしなれ。

されば、これらのブラマン等は家にかへり、子供等に告ぐる樣

「我等は老ひぬ、我子よ、われらは王ストゥダナの息子悟りを得たまふ迄生くべくやいと疑はし、汝等は其時彼れの敎へに從つて誓願を起せ」と而して彼等七人程へて死しぬ。

されど若きブラマン、コンダンヤは長らへ、大聖の敎への爲に所有する總てを放棄してウルベラといふ處に至り

「いかにみるべく樂しき場所なるよ、罪惡と戰ふ若き人の修行がひある所よ」とて彼處を終生の住家としぬ。

彼、後菩薩の發願したまふをきくや、先のブラマン等の息子を尋ねて曰く、「若し汝等の父世に在るならば彼等は今日家を捨て誓願を起すべきに、汝等も若し心あらば來り我にならひて發願すべし」と。其內四人は同意して、コンダンヤを導者とし誓願したり、この五人を五比丘と云ふ。

王コンダンヤのいふをきゝしとき痛く案じ給ひて、問ひて曰はく、「いかなるものをみて我子は世を棄つるならんか」

「老へる人、病める人、死屍と僧侶となり」王おもへらく「かゝるものをして目前に來らしめざれ、我子佛陀とならんに何の益かある。我我子の二千餘の小島に圍まれたる此の四大陸に政と威嚴を布き、天の穹隆を步むがごとく、無數の臣家に侍せられて步むを見るこそ好め」と。以後それらを近づけざる樣四方に衛者を置きぬ。帝王はまた愛子の爲に甚も淸く麗はしき數人の保姆を登用したりしかば菩薩は健かに育ちたまひき。

一日王は耕作の宴といふを設けぬ、其日人々市街を神の宮殿の如く飾りぬ。奴隷や奴婢も悉く新らしき衣服を着け、善き香の花環を冠とし王の家に集ひぬ。王家の千の鋤は幷べられ其他百八の銀もて飾れる、牛の皮の紐と橫木つきたる鋤もありき。王の用ひたまふものは金もて裝はれ牡牛の角も手繩も刺針も亦然なりき。

王は多くの從者と共に息子をつれて場所に來臨したまひ、いと深き蔭を與へつゝある甚繁茂せるジアムブの木の下に小兒の寢台を置き、上に金の星を織り出したる龍蓋を擴げ、周圍に幕を掛けぬ。而して衛者を殘し、王は立派に裝ほひ臣等に衛護せられて耕作に行き給ひぬ。

此時、王は金の鋤をもち大臣等は百八の小さき方をとり農夫等は殘りの鋤もて耕やしぬ。其日王はいとよく此方彼方牛を御しつゝ耕やし給ひ立派に成功したまひしかば菩薩に侍せし保姆等も「いかて帝王の威けき尊容を一目にても見奉らばや」と幕の內より出てゆきぬ。

未來の佛陀は傍に人なきを見給ひ、直ちに起き上り趺跏し呼吸を凝らして第一の禪定に入り給ひぬ。此時他の樹木の蔭はあなた、こなた動搖すれど此のジアムブの木蔭は睹として靜かに輪形になりて些かも亂れざりき。

保姆等種々の食物の用意に忙しく稍歸り遲れしが、やがて、若き主を一人殘しまいらせしを思ひ起し周章として幕をあげ內に歸り來りしに、菩薩は端然として趺跏し給ふのみならず、樹蔭の著るしく他に異なるを見、神聖の氣に打たれ急に王にゆきて告げぬ。「れゝ王よ皇子はかく〳〵の樣に座したまひ、他の木の蔭はまわるにジアムブの木のは輪形になり居れり」と。王亦其奇蹟を見、「こは汝に拂ふべき第二の尊敬なり」とて彼の息子を敬ひたり。

佛陀美しく立派に成人したまひければ、帝王は三つの時候にふさわしき九階、七階、五階の三つの邸宅を作り、四萬の舞姬を備へぬ。されば、菩薩は美しく裝ひたる舞姬に侍せられて、樂しく日を送りたまへり。ラフラの母は其正妃なりき。かく菩薩は歡樂の中に住み給ひしかば、同族等は漸く疑ひて曰く「シッターダは快樂にのみ耽りて何事をも學ばず、若し戰起らば、彼は如何にかする」と。王こをきゝ憂ひて云ひけるは「愛子よ汝の親族は、汝が何事も學ばざるをいへり。汝は彼等の言に對し何をなさんと思ふや」と。「れゝ王よ、われの爲に學ぶべき技はあらず、人々を集め七日の後、我が爲し能ふ限りを彼等にみせつべし」と答へたまひぬ。

七日の後、菩薩は毛さへ裂くといふ矢の名人を集め彼等の技を試しゝ後、おのれの技量をあらはし、如何に彼が他の射人等に優れたるかを見せしめぬ。されば親族等の疑は全く消え去りたり。

告白

不思議の佛緣

齋藤たい

先日はいかなる御緣にか、皆々樣に御面會を致し、又廣大なる御慈悲を戴きました、御話しをさせて戴きまして、いと難有う存じました、あやにく時間も有りませんで一寸とかいつまんで申上ましたが言葉の前後も有り、嘸御聞き苦るしく思召したでありましようが、何卒御めん下さい、又幼少の時より今日迄御慈悲を戴きました御話しを致したいと思ひまして此求道を拜借致しまして皆々樣の御らんを御願ひ申上ます。

私は越後國、即ち御開山聖人の御流罪におなり遊されたる處に生れました。是がそも〳〵御慈悲の始めかと存じます。生家は先祖代々佛緣あつく子供ながらも見眞似聞き眞似にて何となく佛樣が好きで、六七才の頃より常の遊びに風呂敷など肩に掛けて御袈裟の眞似をして何かに向ひ、御經を讀む眞似を致し口からでたらめの事申して居りました。ほんに子供の時分、時々思ひますには男でありたら、僧になるといつもそう思ふて居りました。然し私は實にきかない者でありました。又難有く思ひますには極く幼少の時からへつらひ心と、又何事によらず告口致す事は縱令親でも姉妹でも人の氣あいを惡しく致す樣な事は大嫌て有りました。天然、如來樣より戴いて參りましたものと實に喜びます、私の兄弟姉妹は十七人でありました。内五人死し、十二人生長致しました、大勢の事故同胞と申しても、一名〳〵皆な氣風が變りて居りまして、隨分心をつかひました。

是は全く自分の精神が惡いからであります。自分さへよければ何も心をつかうには及ばぬのであります。そうして私は常に不足心が澤山ありました爲に、ついに我がまゝ申て困りました。是れが、爲に自分の心をひどく苦るしめました。是が誠に御慈悲の難有のであります。此我がまゝ心と又心をつかう性質かなかりせば廣大の御慈悲がいまだ聞へなかつたろうと思ひます。扨て右樣の性質にて追々成長致し十四歲になりました、祖母同年四月死去致しました、其れが緣の始まりにて死去當時二七日迄御檀を置き師匠寺の御僧さんを御檀守りに招待をして置きました、此御僧さんは跡て誠に佛法に志し深くありました。それ故然心に每夜御法りの御話しを聞かせて下されました、其時分は唯佛法が面白いと云ふばかり別になんとも思ひませんでした。それより先づいろんな事を省きまして、右の次第が御緣となり每月祖母の名日には彼の御僧さんを招待致し戒敎を伺ひました迄々と難有い事が分りました、是れが御慈悲の御手まわしでありましたと思ひます。

扨て追々年をとりまして十九才に嫁しました處、自分の思ふまゝに佛法は聞く事も出來ませぬ故、或る時夫に向ひ早く老年になりたら宜敷ひてしようにと申ましたら夫は何故にとたづねました故老年になると佛法を聞く事が出來ますからと申したら、夫に其不心得なる事を大に諭されました、其れは最もの事であります、實に私が惡いのであります。それより追々佛法に薄くなりまして、殆ど七年位は捨てゝ置たと申ても宜敷き位でありましたが、實に難有い事には私の御寺參り致す機會が一ヶ月に一日ありました。其日夫の先き妻て結婚後僅か一年も立ぬまに死去致されたそうであります實に思へば氣の毒なのであります。其命日に參詣致します心は實に見るかげもない心にて、先づ義理だて名聞が十中の五分說敎伺ひたく思うのが三分で、死亡者を氣の毒に存じましたのが二分でありました、實に淺間敷しき事と存じます、是も皆な御慈悲の御手まわしと思ひます。又三年前分娩の節インフルエンザに掛かゝりまして命も危きかと思ふ樣になりました、其時私も誠に未來の事が氣に掛かり四日ばかり夜晝少しも眠る事が出來ず、念佛ざんまいて居りました、其時の苦しみは何にたとへて申樣も有りません、何卒御察し下され。病苦より行く先きの暗き事が遙か苦るしくて〳〵たまりませんでした、其れを人に云ふ事も出來ず、實に今思ひますと皆御手まわしだと思ひます、寬に其時私には申ませんでしたが、產婆が申には產褥熱が出るてあらうとて大そう心配致したそうであります。實に難有い事には其時產褥熱が出ましたら今頃は無間地獄に苦るしんで居るのであります、其れが實に難有いことには其時は追々と直りました。產婆の申しますには、實にあなたが御病氣は不思議て有る、どうしても道理條必ず產褥熱が出る處、出ないのは定めし平素の養生がよいからてあらうと申ました。

私は一時そうかしらんとは思ひましたがよく考へて見れば、皇太子妃殿下の御姉君でおわしましても產褥熱にて遂に此世を御かくれになりましたが、あゝ云ふ身にこうは消毒に於ても申分なき御身にても致方なきことてある。況んや私の樣な不行屆き、實に不思議と申より致方ない。御慈悲の御手まわしと申事は少しも氣がつかず、寧ろ神の御はからひの如く思ふて居りました。それ故猶更如來樣の御手まわしだと思へませんでした。よく〳〵考へて見れば見る程難有いのは御文樣に、諸佛諸神と云へども皆如來の御化身なれば方便の爲に姿をかへて、此世に御出ましになりてあるのだと云ふ事を伺ひて居りました。即ち私は其御方便にあいたてまつりたのであります。

私の樣なる大罪人は、とても一筋道にては他力にまかせる事出來ぬと思召し色々手をかへて、今日迄大悲の御胸を痛めて御いて遊ばしたのであります。實に〳〵何とも御詫の樣もなく、只勿体ない難有い〳〵と思ふのであります、何卒御察し下され。其時は御慈悲の御手まわしとも氣がつかず、今死んては必ず地獄に間違いない故、兎に角病氣全快致してより佛法を願ひ病中は佛法は捨ててしまいました。然し此時捨てたのは熱心に佛法を思ふ事を捨てたのであります。何故なれば信前は佛法の事を思ふと實に此世がいやになり何となく氣が沈みいと不愉快を感ずる故、病氣の爲にはよくないと思ひ、一生懸命と申事やめたのであります、只此世を愉快に思ひ病氣全快の曉には子供を立派に敎育なさんとそれを樂しみに致し病氣養生致しましたが、なか〳〵はき〳〵と致しませんでした。

處へ一昨年或人申には實に神樣と申ものは難有い御利益のあるもので、私の是々の病氣が直りましたと聞き、元より佛法捨て置く事なればひそかに喜び然し心の内に佛樣の御敎へは此世を厭る事は御誡しめあるにも掛かわらず、神頼み致すのは實に氣おくれ致しましたが、追々其道に入り、愈此世は神樣でなければ到底安す〳〵渡る事が出來ぬ、然し去來は何卒如來樣より助けて戴かればならぬと或る時如來樣に御詫を申、何卒此世は神の世の中でありますれはどうしても、神を頼まずば私は死んでしまいます、さうすると、御法りも疎開する事も出來ず、又此世の自分の本分も盡す事も出來ず、實に殘念に思ひます故、何卒御宥し下さいと申てたゞ此世を一心に神に願つて居りました。

以上の事なれど少しはよきを感じましたけれど、時々思ひ

ますには病氣もはか〳〵致さず又佛法も聞く事出來ず、若し此病氣が全快致さずに死す樣な事になりたら、實に蚍蜉取らずてあると思ふと實に何とも云へない心になり、只心細く悲しく、たのみすくなく實に不愉快の心持になりますので、敎會所の先生の所へ行き、右の樣なる事を申、必ず神樣は命を助けてくださるでしようかと念を入れて尋ねると、我身て我身を救ひ助けよの言葉を引き、彼樣の譯なれどあなたの心一つにて必す助かるのてあるとの事にて一寸と力つきましたが、又一寸と心に浮ばして戴きましたのは嗚呼彌陀の本願は自分の心も何もなく必ず助けると申本願てあることを思ひ一寸と難有く感じました。又難有ひ事にはどうしても御念佛が稱へたくて〳〵ならぬ事がありました。

しかし其時直ぐ申事が出來ません、何故かと申すに神に任かせた身體なれば何を致すにも神に願ふてやれと聞いたのてありますれば、殊に方角違ひの佛樣の事だから神樣の心にそむいてはいけないと思ひ、神樣に何卒御念佛を稱へさして下されと頼み、稱へた事が三度ばかり有りました。其他過然稱へた事も度々有りましたが追々薄くなりまして、昨年七月頃より全く、御念佛は失せました。然し御佛前は朝だけ參詣致しました、私は平素の心中は自分は愚か極まる者てありながら人に敬まわれたい又愛されたい、惡しく云われたくないと云ふ心がありまして、實に困りました。

そうして人の善惡を見て、人の惡しきを見ては、自分の惡しきを誡め、善きを見ては、自分をあらため實に困難〳〵、朝から晩まて心を苦るしめ、それても思ふ樣に自分のすきにならず、實に〳〵困りました。そう云ふ性質てありますから猶更病氣が思樣に直りませんてした。良人は私の樣な心の者ても誠に信じてくれました、是れが阿彌陀樣の御慈悲なのてあります。

なぜかと申に此古郷を出ましたのは昨年の十一月十六日てありました、子供四人六才を上に致し二才迄てあります、それに母もあります、其母は當年六十三才てあります母も誠に道理の分かりし人にて私を深切にしてくれました、右樣の家庭にて又店もある爲、私が居りませんと誠に不自由又不都合なるにもかゝはらず、病氣療養に當地へ參る事に致してくれました、是れがいつも良人が私を信ぜずに居りましたなら、死ぜよがしに致されても永々の病氣の事故、致し方なき身にてあります。當地へ參りましたらはこそ、精神雜誌も拜見致し、是迄阿彌陀樣が私に手をかへ品をかへての御慈悲を賜はり實に何とも〳〵云へません、私はいつも心を苦るしめ、罪ばかりつくりて居りますものですから、どうしても地獄はなれて、行き場がないと思うて居りました。自分が惡しざまて有りながら、又慢心が起る事も有ります、實に〳〵見る影のない私てありますのに私の信心を致した神樣の敎へが左の通りてあります。

一眞の道に居りながら眞の道を履まぬ事
一口に眞を語りつゝ心に眞の無き事
一我身の苦難を知りながら人の身の苦難を知らぬ事
一腹立てば心の鏡のくもる事
一吾心の角て我身を討つ事
一人の不行狀を見て我身の不行狀になる事
一壯健の時家業を疎かにし物事に驕る事
一信心する人の眞の信心なき事

右の御誡しめにて實に困難てありました、何もかも行き先きが先に立ちて居りました。

されば先日もおはなし申したとほり、精神雜誌にて目をさまして戴きました私の善知識の御和讃は左の通りなのてあります。

無明長夜の燈炬なり
智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり

罪障重しとなげかされ、
願力無窮にましませば
佛智無邊にましませば
罪業深重もおもからず、
散亂放逸もすてられず
盡十万の無碍光は
無明のやみをてらしつゝ
一念歡喜する人を
必す滅度にいたらしむ
無碍光の利益より
威德廣大の信を得て
必ず煩惱の氷りとけ
すなはち菩提の水となる

實に〳〵此御和讃に目をさまさして戴き見れば、ほんに私の樣なる大罪人、如何致しても〳〵直らてありし此心をも此まゝなりて御もらしなく願め、助ける、間違はさぬの御聲が聞こへて見れば、どうして是れが今迄わからなんて居りしぞ、氣がつかなんて居りしぞと何とも〳〵云へぬ氣持になりまして難有やら嬉しいやら、もつたいないやら、口にも言葉にも云ふ事出來ず、血こそ出てざれ涙は胸も張りさくばかり、暫く聲を忍びて泣て居りました。

それより誠に嬉しく又以前に申ました色々の事情を思ひ出し、生れ落ると今日迄大慈大悲阿彌陀樣は私を御忘れ下されず目のさめる迄、御呼びづめてありたればこそ今日と云ふ今日は實に結構なる境涯にして戴きまして何とも云ひ樣ありませぬ。

實に以前申ました事より今日までの事は皆な阿彌陀樣の御慈悲の御手廻し、いと難有存じまして、又も勿體なく只泣くより外に仕樣が有りませんでした。又夜床につきましても、難有ふて嬉しくて、勿體なくて、じつと、して床の中に居る事出來ず、足をびん〳〵させて居りし事もありました。又御開山樣は雪をしとれに石を枕に遊ばしたのも皆な此私の樣な大罪人があつたればこそ、斯樣な難儀も遊ばしたものと思へば又ももつたいなく、床の中にじつとして暖かくして居る事も出來ず、又自分は誠に斯樣な仕合者にして戴きましたがどうぞ〳〵佛恩報謝の爲又誠に人が氣の毒になりて來て千人萬人必ず〳〵私と同じ處に導き度と熱心に思ひまして、口に何程御念佛申ましても少しも佛恩報謝の樣に思われず、あまり稱へ安きものてすから實に考へて見れば、勿體ないのて有ります。右の樣な次第にて一週間ばかり殆ど夜も眠る事出來ず空腹致し、食すれど味なき心地致し空腹致しても食慾出てず實に苦るしき位てありました。

誰れにも話し致す者もなく、夜眠る事の出來る樣に致したいと思ふて居りました處、或御方より先生の御名を伺ひましてより一日も早く御面會致し心の内を殘らず御話し致さぬ内はどふしても眠る事は出來ぬと思ひ、ろれより夕方先生の處へ伺ひましたに御不幸中の御讀經始まる處へ伺ひました。先生は後日に致し呉れと御申てありましたけれども私は胸が張りさく程に思ふて居りました事てありますれば何と仰せられてもどふしても御話し致さぬ内は歸る事が出來ず、無理に御聞き下さる樣御願ひ致しましたら御承知下され實に嬉しく其時は夢中てありました。心の中のたゞ一ッ御話し致しました。誠に心がしづまりました。

ろれより御いとま致し歸りますと御令閨樣私を御呼びとめ下され只今御經やら又說敎がある故御參りさして致すなら致せと御申下され、實に難有う存じました早速引かへし御參りさして戴きました、それより御說敎も聽聞致し實に阿彌陀樣の御手廻は斯く迄廣大なるものかと思ひました。今まて七十日ばかり如來樣を拜したて

まつた事のない處故丁度御引合せにてしみ〳〵と御禮をとげさせて戴きまして心が落つきました。最初に先生に御話し致しました時先生の仰せには誰れも戴きたる時は踊躍歡喜の思ひはあるけれど、それが佛けの御方便で又必ず安すく致す事が出來ると御申でありました、夜の眠られぬのは決して心配致すには及ばぬと御申でありました、又御申には何程凡夫の力にてあの人も此人も信心の出來る樣にと願ふた處が、とても凡夫のはからいにては行かぬ事故、其れも佛け樣の御力らに御任せ申て、置いた方よき故、心配致すなと、御申て實に考へて見れば、其通りであるのに、自分の凡夫を忘てしまつて斯る事を思つたのははづかしいことです。それから氣もしずまり歸れりました。誠に嬉しふて難有ふて樂しふて何とも〳〵云へない心地にて、ほんにどなた樣にか私の心中味はつて戴かれるものなら味はつて戴きたいと思ひます。

前々申しまた樣な性質にていつも心を苦るしめて居りましたが、いつの間にやら、もう自分の事など少しも思はぬ樣になりました。嗚呼愉快〳〵、まあ何んに喩へたら宜敷いでありましよう、此世にどんな事がありても此樣な愉快な事はない樣で、喩へて見樣がありません。實に嬉しく存じます。扨て是に就き、猶更世か樂しくなりました。以前の苦心はすつかりいづこへか行きてしまひましたし、心は恰も大海の如く廣くなり、平になり、如何なる人と云へども、恐るゝ心もなく、さうして極めて柔和の心になりました、人間を始め虫けらに至る迄、誠に愛らしくなりました。さうして皆な同胞の樣な氣もちが致しまして、實によい氣もちであります。

私の難有く思ひますのは、以前は、あの樣に直したい〳〵と思ふた心が思ふやふに直らなかつた、惡心が阿彌陀樣の御念力なればこう直さうと思わずとも自然に直りましたのです。其氣持ちのよいと云ふたら最早病氣はどこぞ行きてしまひました。先日も極く寒き日平塚へ參りましたが、朝早く車に乘りて新橋さして出立致しました道すがら、大道はすつかり氷りて居り、又風がありまして其寒むさは實に何とも云へない寒さでありました、けれどあまりの嬉しさに車の上に居り、佛恩の稱名口にたへず、御開山樣の雪の中に御難蔌遊ばしたる事を思ひ出し、又八寒地獄の寒さを思ひ出しますと、少しも寒むくなくなりまして、殆ど自分の身體を忘れたかの樣でありました。誠に難有い事には、病氣の時始終寒むいのが一ばん困りまして、それを我まん致しますと直ぐ風を引きます故いつも着物を澤山着て湯婆を入れて居るのに、其日は着物もあまり澤山に着ず、湯婆も入れずに居りましたけれど、少しも風を引きませんでした。

扨て阿彌陀樣が私に安心をさして下さいましたのは、定めし齋藤一家族を此御やるせのなき法りに引き入れしめんが爲の御方便かの樣に思ひ當る事があります、故に齋藤家族を御慈悲の本願に歸せしめざるうちは決して死には致しません。然し若し私が早く此世を去る樣な事があれば、阿彌陀樣が殘りし家族に佛緣を結ばせん爲の御方便の故と思へば是又少しも悲しき事はなひと思ひます。幾度申ても限りのない御慈悲にて斯樣の上は何事も如來の御はからひに御任せ奉り此世の身分相應の活動を致し、先づ母を第一着に御法りに歸すべき樣に御緣を待ち、子供は体育智育德育の欠けめのなき樣、是が私の目的で大々事業で、是に附ては思ふ樣に活動の出來得る樣にさして戴きました、實に私相應の心にして下さいました。

最早身體を忘れて居りますから精神治療同樣にて三周間位の内に身體殆どかわりました、現當二世の御利益とは實に思ひ當り、難有く存します、もう此世の苦勞は、いかなる苦勞も苦勞とは思う事出來ない樣にして下さいました、又心配も何も無くなりました。嗚呼廣大なる御慈悲南無阿彌陀佛〳〵

そうして私は甘才位迄は誠に愚者にて、何處の人も皆自分の樣な者と思ひまして、何でも人の言ふ事、なす事を眞受に致して居りましたが扨ていろんな人に交際致しましてより世の中の人は皆なもう薄情なる實に一寸も油斷のならぬものと思ひまして、私は全く罪惡の疑ひ深き人間になりましたが、嗚呼今日と云ふ今日は久遠大悲の親樣の御念力にて何の疑ひもなく安す〳〵此世を渡る事が出來る樣にして下さいました。實に〳〵私の力からは少しもなく何事も〳〵親樣の御計ひと思へば、難有く其愉快何に喩へ樣もありませんどうぞ御推量下さい。

一言申落しました。私の嬉しい難有い最中にふと考へましたに兄は佛法など少しも思はずに居るが難有く喜び事を一言話しをして、何とかして佛法に志す樣にと思ひましたが、然し近角先生に御意見を伺つてからに致そうと思うて居りました。

或日兄の處に用事が有り遇然參りましたて、色々の話しから遂に忍耐心を失つて喜びの話しを致し且つ進めました。兄の申にはそれは結樣な事であるか、其れに就ては齋藤家の恩を忘れては成らぬと申しました。（齋藤へ嫁したる家なり）聞くより私は實に勿體なく思ひ此廣大なる御恩をあまり狹い事を仰せらるゝと思ひ前後を考へず齋藤の恩處かと申すとあとの口を開かずに兄は立腹致しました。御前は私の論しも用ひずに口答へを致し其樣な事は有るものではない、其樣な佛法信者はどうするのかと申ました處、其一言に私は胸がぎつくり致しました、實に私は大罪人であります、其時直ぐ心に浮んだのは、嗚呼勿体ない、ほんに思へば遥如上人の御文樣に、縱令牛盜人と云はれうとも佛法者後世者とふるまうべからずと、申事一寸思ひ出し縱令兄と云へども佛法心のない者に話し致したるが私の誤りと思ひ、兄に向つて涙をおとして詫ひました。然し其涙は兄に對して出たのでなく、遥如上人に對して出したのであります、斯く迄に御誡しめあるにも掛かわらず殘念なる事したと思ひ、實に申譯ありませんでした。私が只管詫に詫びましたものですから兄は大うう次のでが高くなりまして申には、佛法〳〵と申て、佛法の事にのみ掛かりて、此世の事を捨てゝしまへる樣な事では仕方がないとて、此世渡りの事に付き色々と申しましたが、兄が申迄もなく久遠劫來の親樣よりちやんと御申つけになりて私の心にしみついて居る事ばかり兄は申しました。私の心の内は最早其事は殘らず心に納まつて居りますと云ひたくて〳〵ならぬけれども、又立腹させては一大事と思ひ忍んで、はい〳〵と聞いて居りましたが、然し皆聞いて居る事も出來ず少しは申しました。

是れは阿彌陀樣の仰せらるゝ事と思へばよいのですけれどもあまり兄の勢いがよく、柔和なる處がないものですから阿彌陀樣と思う事が出來ませんでした。

今考へて見ますとたとへ同胞にても考へなしに話し致したる故今後の爲に阿彌陀樣よりの御誡しめかとも思ひ當ります、實にそれより誰れにも話せなくなりました、兄の立腹の時私も一寸腹を立てました處が、今迄嬉しくて難有くてたまらなかつたのが何もなくなりました。

不審に思ひどうして喜べないであらうと思ひ何程喜んで見樣と思ふても猶更喜ぶ事が出來ずそれより床に入りて、嗚呼どうでもよい〳〵、最早御任せ申してしまつたのであるからと思ひ直しまして安心致しよく眠りました、其夜より引きつゞき、よく眠る事が出來る樣になりました。又あまり眠られぬ程の喜びも、それより薄くなりました、矢張り同胞の悲しさにとても捨てる事が出來ず、ふと思ひ出したのに兄はいまだ開業始めにて御得意なき故猶更此世の事に心配致し居るので有るから一つ兄に得意をもたせて此世の事に心配がなくなりたら佛法を持出そうと思ひまして其れより得意の心配を始めましたが、今迄に二軒の得意がふへました、皆な阿彌陀樣の御さしづにてあります。

實に札幌と申處殆ど佛とも法とも知らず此世の事にのみ樂しみて居ります處故如樣の御方便を戴き縱令此身が粉みぢんになりても、札幌に佛法繁昌が出來る事なら是非繁昌さして戴きたいと思ひます。實に思へば〳〵

如來大悲の恩德は、身を粉にしても報ずべし
師主智識の恩德も、骨をくだきても謝ずべし

御開山聖人はよく仰せられて下さいました。實に感じます、ほんに如來樣より賜はりたる心にて此世の活動致したなら必ず何も成功致す事と思ひます。人間は精神大海の如く何事も恐るゝ事なくばいかなる大事業も恐れず苦るしまずに出來るであろうと思ひます、私如き者は女の事故何も分りませんが、男子にて何か自分の一つの目的が有りましたなら嘸立派に出來るだろうと思ひます、何卒皆々樣一日も早く阿彌陀樣に御任せ申して若き時に御安心になり遊ばせ、實に其愉快は限りありません。

加賀千代女

一煩惱の蚊は拂へども去らず

一法性の螢は招ねけども來らず
一更らば扇をなげ捨てゝ一心に他力尊や蚊屋の内

實にうれより外にないと思ひます御任かせ申さぬ前は兎角此世の過去未來を思ひ出しまして困りましたが其時は左の歌を思ひ出しなるべく取り越し苦勞を致さぬ樣につとめて居りました、けれど矢張り夕方にてもなると何となく心が沈む樣な氣になりました

一世の中は今日より外はなかりけり
　　昨日は過ぎつあすは知られず。

最早只今の身にさして戴きましてより難有い事には右の歌の通り自然になりました故何も心に掛かる處はありません。

又古歌に

一世の中は一つかなへば又二つ三つ　四つ五つ六つ　か敷世や

實に以前は右の歌の通りてありました。然しいまと云ふ今日はいつも滿足にて不足の處は少しもなく實に愉快であります。誠に御名殘り惜しきかな、私は東京に居る身てなき故最早難有御法りも拜聽致す事も出來ません當月一回限りてあります、實に殘念に思ひます、何卒皆々樣には御膝元にれはします事なれば、一時も早く御安心下さい、結構なる御法話をよく御聽聞遊ばす樣御願ひ申上ます。

申上たい事海山有りますけれど如何程申ても限りありません。つまらぬ永文句只々私の心其のまゝなれば左樣思召下さいませ。

所感

宮澤政次郎

昨日は毎に御懇の御紙面及時代思潮御貸與被下難有御禮申上候何より申上候邪宜敷や我身を顧みれば實に憐むべき日暮らしに御座候皆冬以來少しく俗邪取込候て成すべき感謝も疎かにやゝもすれば思想の中心すらも何處へ落居するやら暴風驟雨は時を得顔に我心内に荒れ狂ひ霧露之下明無暗の法文も如何やと危うく思はるゝ折節あれどもかゝる者にも大慈の御手は捨て玉はず除夜直に元朝に孵ずる刹那の間にも煩惱黑暗の切れ間より微かに照らし玉はる御光は絶へず感謝の御唱名を促がし被申候胃腸弱き私共は到底世の博學多聞の人々の如く何事も理解する能力は無之候へば若し知慧を以て悟を得べきものならば幾劫を經るも空しく元の木阿彌より詮なきこと共に候何の幸か難値難聞の易行の御法に逢ふことを得て往生之業念佛爲本之信之本に此度生死を離れ候とは誠に逢ひ難くも逢ひ難幸と存申候とてもかくても煩はしき學問や窮理や研究や奚するとは何の能力も無きものに候へば假令妄信と笑はれ候ても愚人と誹られ候ても此一行なりて我等の爲し得るに堪る所に無之事と存候元より杖も便りも無き盲人同樣の者に候へば假令念佛は無間の業なればとて何の後悔致す間敷候是なくとても奈落ならては落處なき身の上なれば誠に宗祖上人の御口眞似は恐れ多けれど金くの處假令無間にても同じ樣なる業をもてる過去遠々の同朋同信の方が其處に充滿し居らるゝこと存候間氷寒熱沍の中にても苦樂を共に可致候煩惱繁き私共は夫にても清涼の樂處に獨居するには增り可申候はん佛は西方十萬億の淨土にましますとも又は無邊の虛空の中已身の中にもおはしまし候もよし乃至あるもよしなきもよし又同一の念佛の行者未來世共にあるもよしなきもよし此御名を離れては私共生活の意義なきことは今こそ存じ合はされ候ドンと一突呼吸止まる直に死骸と云ふものに名を變へべき肉身を以て何の學問の詮索やら誠に煩はし敷御事と覺へ候(蓮師御製作の白骨の御文元朝に拜讀し奉る習慣の由誠に難有御教訓と存候)思へば世の中は廣きものと被存候肉身の存在は時々刻々に消耗するものと存候にも拘はらず最急の問題はソッチ除けにして六ケ敷大昔よりの詮義立てに閑々日月を弄ぶ人の多きこと仙骨を帶びたるとはかゝる人々にも候か呑氣さ加減實に羨ま敷限りに御座候何卒如此の閑餘暇なき煩惱熾盛の窮子を御憐憫被下度候如何に海山の珍味にても胃腸弱き私共は迚も其儘の消化は覺束なく候間折御は乳味の御教誨を下し玉はらん事是所申候

尙終りに四海を奄有せられ候にも勝る明玉を抱かれ候尊大兄にも折々の御述懷は矢張肉身ある間の證として止を得ぬ過去久遠劫よりの宿習たるべくや候はんまして極劣底下の私共には若し不如意の述懷を申さば生涯口を極めて申候とも恐らくは盡き申間敷事に候唯何事もなく慈光の下寘舶を得てこそ日々を昌らかに過し可申候先づは御禮旁々何が何やら亂筆草々失禮の言辭有之候はゞ偏に御宥恕を仰候　頓首

高橋樣

謹啓(中略)一月御發行の來道誌上にて始めて令嗣の御死去の事承知仕り先生並に令閨の御心中さこそと察入候小生も今日まで既に二子を失ひ申候此第二の方の死は明治三十年十二月二十九日小生が丁度煩悶中に候ひしかば小生は非常に悲嘆いたし一層その煩悶を高め申候爾し今にして思へばその煩悶の高ぜしも亦如來の御手引なりしに相違無之候偖其當時の我心情を回想いたし候へば我子の死を傷むにつけても我が愛情の如何に切なりしかを自覺いたされ同時に如來の御慈悲の深きも亦かゝる味のものかと存じ扨自分は此深き御慈悲に對し如何ほど感謝の念を有するかを顧みればそれは〳〵實に漸く〳〵して恥入候より外無之候小生は先生の御文中「されど人間の愛情は無意識に我をして茫然として業務に從ふに懶からしむ」の一句を拜讀いたし候時小生自身の當時の心持を想起し沈痛極まる感に打たれ申候而して後段の「猶濁世の露命を恃みて未來の無量壽を仰がず、唯人世示現の光明を慕ひて彼岸無量光明土を欣ばず」の二句に至り不覺眞實報土が從來より一入有がたく相成り申候この段ことに感謝仕り候、向後我子若しくは親族の死を悲しみ悶ゆる人々に此御文章を示し候へば必ず安慰を得て如來の光明に接し可申と信じ申候實に光子樣の御往生は數多の衆生を度せられし事と信じ申候右御悔までに申述候　草々

牛窪德太郎　九拜

二月十一日

近角先生

再白　小生は其後佛光の下に少しも私意を挿まずして寄宿舍を監督いたし候處時々不思議の事實を實見いたし候、(煙草の禁を犯すもの殆となく相成り又る所爲は是又殆と無くなり申候など自分の力にては到底)て益々佛恩を感謝かゝる狀態に寄宿舍を到らしむる事は不能と存じ候など)いたし居候爾し是皆佛力と信じながらも矢張心中のどこかにてうまくイッタと自負する樣の心持有之候て凡夫の胆深きを悔ひ居申候　不備

研究

讀書漫錄

常盤大定

○六足論

佛敎中に於て、尤も早くあらはれたる論部は、六足論であつて、佛滅二三世紀の間に成立したものらしく、皆上座部に屬するもので、これが發智論を經て大毘婆沙論となりて、佛敎敎理史上に一新時期を劃する事となつた。從來六足や發智は、一向に注目されなかつたものだが、歷史研究を以て自任するものは、是非之に注意せねばならぬものである。佛敎々理開展上に於ける第一期を調査せんとするものは、先づ之を研究すべき必要がある。佛敎の六足論といふ事に就ていふ事は、こゝには止めて、婆羅門敎の六足論に付て、一言しやう。佛敎にも六足があるが、婆敎にも亦六足かあるは、面白い對照である。

婆敎の六足は、又は吠陀六分といつてもよからう。吠陀を支持せんが爲の六分又は六足である。拙著馬鳴論に於て、四毘陀六論の六論を、六派哲學の事に解したが、或はこの六足を指すのではあるまいかといふ思想が、この頃强く予の思想を動かして居る。

一、切波論 Kalpa. ＝式彙）吠陀の儀式に關す
二、樹提伽論 Jyotisha ＝天文）
三、式叉論 Sikshā ＝音彙）吠陀讀誦に關す
四、闍陀論 Chhandas＝韻彙）
五、尼祿多論 Nirukta ＝語彙）吠陀解釋に關す
六、毘伽羅論 Vyākarana＝文法）

之を見ても、印度人が如何に吠陀を尊重し且つ如何に眞摯に之を取扱つたが分る。音韻の研究に於ては、誠に綿密を極めて居るとの事である。何の爲に、左樣になつたかといへば、吠陀は天啓書であつて、人の作りたものでない、其一語一音の間にも、非常の功德がある。若し之を誤讀てもしたなら、忽ち神罰を蒙るといふのであるから、音の曲節、抑揚、長短等は、非常の注意を以て研究されたもので、爲に音韻の論を發達せしめたのである。後世に於て巧論外道が起つたのも、無理はない。

語彙も、古代のものにしては驚くべきものだといふ事だが、分けて驚くべきは、文法である。從來幾多の文法書があつたのを波尼膩 Pāṇini なる天才が出て、大成して浩瀚なる大部を作し、此中に於て、實に語を其語根に還元する方法までを說いて居るとの事である。近世梵語が泰西に紹介せられてより、獨逸人の組織的頭腦か忽ちに比較言語學を編み出し、梵、希、羅、より始めて現在の英獨佛等の各語を語根に還元して是等の間に貫通せる法理を發見して、遂に印度人も、泰西人も、元は同一先祖より來れるものとの結論を得るに至つた、比較言語學は實に第十九世紀の一大發見であるといはゞ所だが、二千年餘の古代に於て、既に〳〵語根を研究するといふ事があつたといふに至りては、豈驚くべきにあらずやである、馬翁の如きも、波尼膩の大文法に比較する時は、世に文法なしといふ程であるといふまでに感服して居る。かゝる發達も、もとはといへば、吠陀を正解したいといふ宗教心に基いて居るのである。

更に驚くべきは吠陀中にあるそのまゝに儀式を執行したいといふ熱心より式彙を生じ、而も祭壇の構造を聖典の文言の通りに、一分一厘も相違なからしめんといふ希望より幾何學を發達せしめ又文言の通りの年月日時に執行したいとの欲求より天文を發達せしめたといふ事である。世に何國が宗教に熱心だといふても、印度に如く所はあるまい、面倒な幾何學は祭壇構造より來り深遠な天文學は祭祀の年時を定むるより來たといふに至りては滑稽といふべき程の眞摯ではあるまいか。

斯る調子であるから印度の文學も、科學も、法律も、皆宗教を本として發達したるもので印度にては、宗教を離れて意味あるものは一つもない。哲學も亦宗教の爲に發達したものである。解脫涅槃に達せんとて、冥想した結果が即ち哲學と名けらるゝのである。されば印度の一切の教學は皆宗教の一科なのである。

六足といふ事より、筆に任せて、飛だ方面に走つて來たが、モーッ滑稽な程の眞面目の點を擧げて見やう。そは約論 Mimāṁsā の事である。これは吠陀の內容には無關係で、其文言の上にのみ關係したる宗教哲學である。即ち佛教や何や

の非儀式態度に反抗して、人間の本務として供犧の必要があるといふ事を、大に論じ以て、印度の根本思想を鼓吹したのである。所が餘りに儀式をのみ主張したが爲に、儀式即ち宗教といふ樣な、意外な邊に走り去りて、大切な神を忘るゝに至つた。兄弟分の吠檀多派ですら、聲論の主張よりせば、神を立つるの餘地がないといつた程である。滑稽な程まで眞面目てはあるが、吾人は少しく此態度を學びたいと思ふ。

○佛婆兩教の消長

人は皆佛教が婆羅門教の影響を蒙りた事を注目する。泰西人中にありてはモニーエル、ヰリアムスの如きは、其尤も甚しきもので何でも角でも、婆羅門教の方の肩ばかりを持ちたがる一種の癖を有して居る、所が能く〳〵調査の歩を進めて見ると、佛教と婆教との間の交渉は存外に少い。勿論佛陀は婆教を攻擊せられなかつたが、さりとて其中より採用した所は一向にない樣に見える。而して後世になると婆羅門教が佛教の影響を受けた事が頗る多くある。

全体この兩教の間柄は、至りて平穩なものであつて、佛陀の弟子中に幾多の婆羅門がある事にても推量する事が出來る。佛教は阿育大王以後俄に盛大となつたけれども、婆教も亦素より頗る盛大であつたもので婆教は印度民族の固有のものであるから容易な事で起滅するものでない。紀元後第四世紀の末に、法顯三藏が、五印を遊歷した時は、いづこに至るも、兩教の兩々相幷んで盛大であつたのを見た。この頃に至るまで兩教間の軋轢は、餘りなかつたらしい。

佛典中、往々にして、佛法の迫害に遇つた事を記して居るものがあるが、これは決して兩教間の軋轢と見る事は出來ない。唯一部に於て、或國王が婆教に對する熱心よりしたまでである。他の一部には、之と同樣に、佛教に對する熱心より、婆羅門の徒を放逐した事もあるに相違ない。

兩教の間の軋轢が漸く甚しくなりて來たのは、婆羅門教が紀元後第六世紀頃に於て、新形を取りて、復興してからの事である。此兩教は長年月の間、兩々相幷行して來たが佛教の方は、活氣もあり、平民的でもあり、且つ王族ならぬものが統治者となつた所には、常に佛教を大に保護する傾があるから、次第々々に婆教の領分を蠶食して、流石の婆教も漸く大厦の危きに接したものと見える。是に於てか、如何せば此頹勢を挽回して、佛教の上に出てやうかとの工夫をめぐらした所、從來の如く、一部の人士のみ之を專らにする樣では之を一般ならしむる事は出來ない。且つ抽象的の神体のみにては、佛陀禮拜の活力あるには及ばない。といふ樣な所に氣が付てきたから、そこで佛教に倣ひ、像拜も初めた、殿堂も作りた、垂迹說も初めた。こゝが大に佛教の影響を受けた所で、即ち敵の武器を奪て敵を打つ所であつた。所が、此方畧は非常の成功を遂げて、自体が國民教であるものだから、捲土重來の勢で忽ちの間に、佛教を席捲し初めたのである。こゝから兩教間の軋轢が、頗る激しくなつたものである。玄奘三藏が西曆第七世紀に渡天した時には、至る所に、兩教間の衝突を見、且つ至る所に、佛教聖地の荒廢を見たのである。法顯三藏の後僅に二百年の間に、大變な相違を來したのである。

以上ダラシもなく記き列ねたが、已上の趣旨は一は佛教が婆

羅門教に及ぼせる影響を述べて、一部の近眼者流に告げたいと思ふの意よりし、一は佛教は當初より婆教に反對し、換言すれば婆教に取て代らんとの野心を有して起り、婆教は又これに對抗して大にしのぎをけづりたものと誤解して居る人の妄を闢かんとの意よりしたのであるが、能く味つて見る人には、兩方の趣意が了解さるゝ事と思ふ。

序にいふが已上の如く述べたら、或は佛婆兩教徒の辯論を持ち出して、兩教間の衝突を證據立てんとする人もあらう。即ち馬鳴菩薩が、もと外道であつた時に、佛教の無我說を攻擊して中印の僧侶を沈默せしめた事などを、第一着に持ち出すだらう。が、これは兩教間の軋轢といふやうなものでない。甚だ性質を異にしたものである。全体印度といふ所は非常に教學に眞面目の所であつて辯論の武者修行をしたり、自ら論題を出して難者の至るを待つたりする事は、平常の事であつたので、是は寧ろ元氣ある教學者の通例の態度であつた。こういふ樣な事で、至る所に勝利を得れば、其名聲は非常であつて、隨て供養も多かつたものと見ねる。既に釋尊の當時ですら、辯論を以て天下を横行するものがあつたもので、而も女流であつて、論題を掲げて難者を求めて居るものすらあつたのである。かゝる印度の狀態であるから、辯論があつたといふ事を以て、直に之を兩教間の軋轢と見る事は出來ないのである。馬鳴の外道たりし時は、教學者の畢生の快事として居る所の、辯論の勝利を貪らんとして、佛徒の法城に肉薄したのに過ぎぬのであらう。

○像拜及び垂迹說

兩教間の交渉に付て、猶一言したいのは、前に述べた像拜と垂迹說との事である。像拜といふには、語弊もあらうが、予の意味は人間に直接の關係ある、慈悲の客體を禮拜する事を意味したのである。

佛教が其教理の開發に於て、常に他の教學に一日の長を有して居たものとは、予の意見である。人は皆佛教が數論に學んだとか、婆羅門教に取りたとかいふのと恰も反對なのである。予の淺學かは知らぬが、從來の研究よりする時は、佛教の三身說の如きは、ドー見ても、婆教の三位說よりも前である。佛身觀には、幾多の種類があらうが、其尤も完全なものは、法報應の三身說である。明に三身の說の成立しのたは、紀元後でもあらうが、三身說といふものは佛滅の後、餘り久しからずして佛徒の間に行はれたものである。法は法身となるし、佛は應身となるし、加之五百回の生を累ねて菩薩の修行をせられたといふ本生談 Jātaka があるし、旁々以て佛身觀は早く發展し、大に民衆の渴仰を促したものである。既に大衆部の間には、光明無量壽命無量の佛身觀さへ行はれたものである。

所が婆教の方には、早くより梵天 Brahmā の思想はあつたが、これが一般の崇拜の對象とはならなかつたもので、一般のものは、羅摩 Rāma だの、吉利瑟那 Krishna だのを禮拜し、或は又迷信を伴へる毘紐奴 Vishnu だの尸婆 Siva だのを渴仰したものである。そこで、前述の如く、婆教が復興し來る時には、實に是等の信仰を促へ來つて、之を理化し、聖化し、以て一般民衆を惹き付けたのである。即ち毘紐奴を以て毘陀

中のその名に結び付け、尸婆を以て、吠陀中暴風雨神ルドラ Rudra に結び付け、梵天を以て往古の祈禱の神と爲し、以て是等信仰が聖典中に於て、其位置を有して居るものとの說明を下した。即ち之を理化し、聖化したのである。猶又羅摩や、吉利瑟那は、單に詩篇中の英雄に過ぎなかつたのであるが、婆羅門の徒は、之を聖化せんが爲に、之を毘紐奴の垂迹としたのである。毘紐奴慈悲の神であるから、人類が危機に臨んで居る時には、常に垂迹して之を救濟するもので、其垂迹は天地開けて以來幾度かあつた。羅摩も、吉利瑟那も、亦其中であるといふのである。

梵天と毘紐奴と尸婆とは、婆教の三位神で、非常に尊いものである。梵天は統一の神で、毘紐奴は保存の神、尸婆は破壞の神である。この三神は近世に來りては、非常に腐敗を重ねて、迷信の根源となつたが、當時にあつては、能く組織せられたもので、浩瀚なる富蘭那文學 Purāna は皆此三位を主要なものとして居る。而して此三位神は、いつ頃より唱導せられたかといふに、即ち婆教復興の時よりの事で、佛教の三身說に比すれば、大に後れて居る。そこで、予は此三位は佛教の三身說の脫化であると思ふのである。少くも三身說の影響を受けたに相違ないと思ふのである。垂迹說の如きは、いふまでもなく、應身說や、又は本生談の影響を受けたものと思ふのである。

若し予の觀察にして誤りなくんば、佛教が常に他の教學よりも一日の長を有して居たといふ事を證據立つる有力の資料に供する事が出來やうと思ふ。

講義

歎異鈔

近角常觀

序說

著作當時の信仰界

吾人は進みて、此書が著はされた當時の信仰狀態について、歷史的に研究して見たいとおもふ。勿論此研究は單に事實的の問題のみではなく、信仰上の內心の經驗に照して味はねばならぬ。ろは外でもない、古今東西の宗教歷史を通じて、絕對の信仰の起るときは必らず「律法と信仰」といへる問題を生じ來るのである。其意味は從來の宗教の教ふる處が一種の形式とあり、律法的に人の行爲を束縛する强制的の意義と變じ去られたるとき新らしき信仰は其律法を破り來つて絕對の救濟を與ふることとなる、釋尊傳に於て始め釋尊は印度從來の彼の波羅門を學び哲學的に其教理を研究し實行的に其苦行を修したまひしが、結局何等の効力もなきことを看破して、斷然これをなげうち、尼連禪河に沐浴して、樹下石上に靜坐內觀し遂に降魔成道の曉に達せられたは、即ち波羅門の律法主義を破壞して、佛教の絕對解脫の經驗の起りたる根本である。又基督教は猶太教の律法主義を破壞して愛の救濟主義を說き

たものである。淨土門の起りたるも全く同意義にして、聖道門自力の律法主義を破壞して易行念佛の絕對救濟を開き來つたのである。法然上人が聖道門難行道を或は抛ち或は閣き或は捨て或は離ると宣ふごときは皆この律法主義を破壞せられた點である。而して親鸞聖人に至つては全然律法主義を破壞して自ら無戒名字の比丘なりと告白して彌陀の誓願不思議の絕對救濟を說きたまふたのである。此點に於ては、古今東西の宗敎歷史上親鸞聖人の上に出づるものは無いと確信する。

かくの如く、宗敎歷史の通則として律法主義の羈絆を脫して、絕對救濟の信仰主義起りたる後、又其信仰主義が却て前の律法主義の精神に立ち歸りて、一種の新たなる律法主義を來すことがある、猶太敎の律法主義を脫して生れ出てたる基督敎の絕對救濟の主義が亦復猶太敎の律法主義の爲に化せられて、猶太的基督敎と云ふものを生ずるに至つた。佛敎の如きも波羅門の苦行主義を排して解脫涅槃に至りたるものにして佛敎の戒律の如きは本來健全なる道德に外ならざるにもかゝはらず、後には此の戒律が律法主義に陷り、遂に法然聖人の他力念佛の敎濟主義によりて破壞せられたものである。然るに法然聖人の他力の念佛も後には單に念佛を行ずる一種の律法主義と變化し去りたるを以て、親鸞聖人は是れを破壞するが爲に絕對信仰の救濟主義を說かれたのである。然るに親鸞聖人の滅後に於ても、未だ一種の律法主義が起りて掟てに就きて事細かに言ふて信仰を疎がにする主義が起つたらしい、而して歎異鈔は此主義に反對して書いたものらしい。故に此書はたゞに親鸞聖人の絕對救濟を說くのみならず、聖人滅後に起れる彼の第二の律法主義の異義に對して猶力强く絕對救濟を說いたものらしい、是れ此嘆異鈔に於て惡人救濟なること最も著しく主張されてある所以である。

聖人が晩年に於ける傳道に於て弟子方の間に諸種の傾向を生じたものらしい、吾人は歷史上の問題としての材料は備らざるも信仰上の經過によりて些か當時の樣子を研究しようとおもふ。聖人は此の嘆異鈔の上に書きあらはされたるごとく佛陀の絕對救濟を說き如何なる罪惡の者も助けたまうといふことを示された。多くの人は是れが爲に深く自分の惡しき事を感じて如來の御慈悲を戴かれたが、或人は眞實如來の御慈悲を戴かずして却つて惡しき者を救ひたまふ佛陀故、惡をしても差支へない、惡を作りて往生の業とすべしと云へるが如き邪見に陷つた人があつたらしい、是れか第一に起りたる他力信仰の異解である。此の樣子は末燈鈔及び御消息集の中に明らかにあらはれてある。

御消息集第五通に曰く「信願坊がまふすやう、かへす〳〵不便のことなり、わるき身なればとて、ことさらに、ひがごとをこのみて、師のため善知識のため、あしきことを沙汰し、念佛の人々の爲に、とがとなるべきことを知らずば、佛恩を知らず、よくはからひたまふべし、（乃至）信願坊がまふすやうは、凡夫のならひなれば、惡るきこそ本なればとて、思ふまじきことを好み、身にもすまじきことをし、口にも云ふまじきことを申すべきように、まふされ候こそ、信願坊が申し樣とは心得す候、往生に障りなければとて、辟

事をこのむべしとは、まうしたること候はず、かへす〳〵心得ずおぼえ候。詮ずる所、辟事申さん人は、其身一人こそ、ともかくもなりぬさふらはめ、すべて、よろづの念佛者の妨げとなるべしとは、おぼえず候云々（慈信坊宛）

末燈鈔終より二通目に曰く、先づ各の昔は彌陀の誓をもしらず、阿彌陀佛をも申さずおはしまし候しが、釋迦彌陀の御方便に催されて今彌陀の誓をきゝはじめておはします身にて候なり、もとは無明の酒によひて貪欲瞋恚愚癡の三毒をのみ、このみあふて候つるに、佛のちかひをきゝはじめしより、無明の醉もやう〳〵すこしづゝさめ、三毒もすこしづゝこのまずして阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし、然るになほ醉もさめやらぬに重ねて醉をすゝめ、毒もさえやらぬに、なを毒をすゝめられ候らんこそあさましく候へ、煩惱具足の身なればとて心にまかせて、身にもすまじきをも許し、口にも言ふまじきことをも許し、心にも思ふまじきことをも許して、いかにも心の儘にてあるべしと申しあふて候らんこそ返す〳〵不便におぼえ候へ醉もさめやらぬになほ酒をすゝめ、毒も消えやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんが如し、藥あり毒をこのめと候らんことはあるべくも候はずとこそおぼえ候、

此等の消息によりて見るに當時明らかに邪見に陷りたる人のあつたに違ひない、そして聖人がいかにも之を不便に思召して懇々と諭し、又切々と誡しめられた樣子は歷々と見える樣である、猶此末燈鈔の次ぎの文字が聖人罪惡救濟を說かれた意味が明らかになりてある、即ち末だ佛の慈悲を見出さずして、我身の如き罪惡深きものが如何にせば助かるべきかと云ふ人にこそ佛の絕對救濟を說くのであるとの事である、既に佛の御悲慈を感じたるものが、我身の惡しきを懺悔する心のなき筈がないとの誡てある曰く

佛の御名をもきゝ念佛を申して、ひさしくなりておはしまさん人々はこの世のあしきことを厭ふしるし、この身の惡しきことをば厭ひ捨てんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ、はじめて佛のちかひをきゝはじむる人々のわが身のわるく、こゝろのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふ人にこそ煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善惡をばさせずして迎へたまふぞとは申候へ、かくきゝてのち佛を信ぜんとおもふこゝろふかくなりぬるに、まことにこの身をも厭ひ、流轉せんことを悲みて深く誓をも信じ阿彌陀佛をこのみ申しなんとする人はもとの心のまゝに惡事をもふるまひなんとせんとおぼしめしあはせたまはばこそ世を厭ふしるしにて候はめ、また往生の信心は釋迦彌陀の御すゝめによりておこるとこそみえて候へばさりとも、まことのこゝろおこらせたまひなんには、いかゞむかしの御心の儘にて候べき、

如來撰擇の願心より發起し、大聖矜哀の善巧より開闡したる眞實の信心を得たるものが昔の儘の心にてあるべき筈はないとまで呵責されたのである、かく聖人が平素信仰以後の行爲につきて時々御弟子に戒められたものと見へる、其聖人の訓誡を書集めたものが即ち親鸞聖人の二十一箇條である、ろこで是非此二十一箇條につきて私の考を披瀝せねばならぬ、

私は嘗て花園文庫といふ書に於て之を一瞥したることがあつた、されど當時私に考ふるに是は頗る怪しきものである、何んとなれば親鸞聖人が細々しく箇條を作り、張文をなして注意せらるといふは如何はしきと考へた、しかるに昨年越後高田淨興寺に參詣して同寺に傳ふる二十一箇條張文を拜見するに及びて大に疑が晴れたのみならず、大に當時の信仰界の模樣を知ることが出來たのである、即ちこの二十一箇條張文の內容は何れも親鸞聖人の自から戒められたものではあるが、之を善性聖人が箇條に作りて集記せられたものらしい、此善性聖人は後鳥羽天皇の第十二の皇子にして、親鸞聖人に隨て出家し、淨興寺の祖先であるとの事であるが、まづ其歷史的考證は他日に讓り、少くとも其主義が坐ろに見ることが出來る、即ち一方には惡を作りて往生の業とすべしとまでいふ邪見が起りたる反動として、他の一方には聖人の訓誡を箇條に作りて之を嚴守せざる輩は衆中を停放すべきもの也とまで切りつめたものらしい、今其張文の全文を擧ぐれば左の如し。

專修念佛御張文日記事

先師傳受之手次事

從二愚禿親鸞聖人一善性聖人集記也法性法師傳受令二披見一固可レ令レ信者也

一不レ可二諸法誹謗一

一縱雖レ寫二賜聖教幷師判一於下背二師說一之輩上者有二衆徒之義定一須二所レ傳聖教被二悔還一

一於二修學二道一互不レ可レ有二偏執一

一以二無智身一不レ可レ好二諍論一

一不レ勸二是非一私不レ可レ勸二當弟子一等

一未不レ傳二師說一輩私說二邪義一揚二師匠惡名一事尤可留二之一

一於二念佛門一生二十惡五逆一信知而不レ可レ犯二小罪一

一於二無智身一戲論諍論之處可レ遠二離百由旬一

一可レ留二船大乘一

一張二夜道一可レ留二獨行一

一不レ可レ輕二慢師長一師長者愚禿抄上可レ見二仁邪一者也

一付二諸事一不レ可レ難レ人

一念佛行者以二造惡之身一與二諸佛如來一同旨不レ可レ稱

一賣二買人倫幷牛馬一可レ留二口入一

一可レ留二讒言中言虛言一

一可レ留二他人之妻女懷犯一事

一可レ留二諸博奕雙六一

一念佛勤行之日男女不レ可二同座一

一同勤行之日不レ可レ食二魚鳥幷五辛一同勤行日可レ留二酒狂一

一忌者可レ隨二其所主忌給一

已前二十一箇條甄錄如是堅守二此法一敢不レ可レ違獨於下不レ用二此制法一之輩上者宜經二衆徒之僉議一可レ被レ停二放衆中一者也抑書二置此誓文一事者如二新選五念門一註論及不レ違二先師作一以二願力成就之五念門一依レ傳二知識成就之意趣一也、

正嘉年中依二此論一信心疎者出來各令二偏執一之刻自二古聖人一所給御消息重令二披見一得二無上覺之悟一御計也更不レ有二行者計一無義義承候此人々一切不レ知事候云和之以レ字寫二漢之字一

此二十一個條の內容を檢するに頗る味の深きものである、其主要なる點は皆親鸞聖人の訓戒夫自身を書きたものに違いない、何んとならば口傳鈔若くは嘆異鈔等に出てある聖人の訓戒と一致する點が多いのである、「念佛門に於ては十惡五逆生ると信知して、而も小罪をも犯すべからず」、「念佛の行者造惡の身を以て諸佛如來と同等なりといふべからず」、「戲論諍論のところ百由旬を遠離すべし」等の如きは其著しきものである、されど「師判に背く輩は其賜はる所の聖敎を悔ひ還さるべし」といふことは口傳鈔歎異鈔とは正反對になつてある、是で此二十一個條を集記せられた善性聖人なる人の氣象が分かる、餘程嚴格主義の人であつたらしい、既に此の如き個條を書くといふことが律法主義の遣り方である。特に此張文に從はぬものは衆中を停放するといふは頗る嚴しき方法である。

そこで此誓文は親鸞聖人が書かれたものでなけねども、親鸞聖人の書かれたと同樣であると云ふ辨解である、恰も二門偈に於て行者が信後に於て行ふ處の五念門を本と彌陀如來の願力に於て成就したまふ五念門であると言はれたるが如く、此二十一個條も畢竟知識成就である、即親鸞聖人の作であるとの奧書である、加之當時既に此二十一個條を主張して自力の計に陷りたものがあつたのである、此二十一個條の如きも信仰上自然に行ふことが出來るもので、かくせねばならぬと云ふ律法主義ではない、されど既に張文を作りて之を主張したる已上は此自力の計が盛んになつたのである、奧書に既に明言してある通り、正嘉年中此主義の爲めに、自力の計を主張して信心疎かなるものが出來た、そこで聖人の御消息を拜するに無上覺の悟を得ることは、佛の御計て、決して行者の計にあらずとの事なれば、自力の計を挿むべからずとの注意である、此消息は御消息集最後の消息である、されば此の如き注意が奧書にかきてあるは、此二十一個條張文が少からず律法主義の傾向を造出した證據である、是が第二の異解である、古來宗敎歷史に救濟主義が再び律法主義に立歸るといふは即ち是である、釋尊の戒律が律法主義に陷り、法然聖人の念佛が自力主義に陷りたと同樣の有樣である、歎異鈔は恰も此第一の異解に對しては勿論第二の異解に對して極力絕對救濟を說かれたものである、親鸞聖人が平素說きたまひし絕對救濟の意味を明らかにして此第二の律法主義を戒められたるものである、既に本文にて明瞭なる如く、諸の異解に對して眞實の信仰を說きたまひしものなれど、歎異鈔全體として如何にも此點に力が入つてある、即ち惡人救濟の意義は此所である、而して仔細に歎異鈔の本文を見れば明瞭である、第十三節は明らかに此消息を洩してある、

そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとてわざとこのみて惡をつくりて往生の業とすべきよしをいひて、やう〳〵にあしさまなることのきこえさふらひしとき、御消息にくすりあればとて毒をこのむべからずとこそあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり、また〳〵惡は往生のさはりたるべしとにはあらず、持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらはいかてか生死をはなるべきや。かゝ

るあさましき身も本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさらは、さればとて身にそなへざらん惡業はよもつくられさふらはじものを。また、うみかはに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりて、いのちをつぐともがらも、あさなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなり、さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうにおもひ、あるひは道場にはりぶみをして、なんなんのことしたらんものをは道場へいるべからずなんどといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虛假をいだけるものか、願にほこりて、つくらんつみも宿業のもよほすゆゑなり、されば よきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてさふらへ、

かくの如く絶對慈悲の救濟を說きたきまふのが歎異鈔の至極である、而して第一の異解の如きわざとこのみて惡を作りて往生の業とせんなどいへるは、未だ眞實我身の惡しきを自覺せぬのである、第二の異解の如く持戒持律にて救はれんと欲するは未だ眞實の絶對の救濟を自覺せぬのである、要するに何れにしても眞實の佛陀の御惠みを感せぬからである、之を歎きて一室の行者の中に信心異ることなからんため、なく〳〵筆を染めて書かれたのが即ち此歎異鈔である

嘆咏

日知の釜

左千夫

よき人の日頃用ゐ給へる釜として世に傳はれるものに同形同種のいと古き釜を得ぬ即ち嬉しき思を歌ふ

望月と光おろがみ吾仰く大聖も釜めてませり

み佛につかへ樂む聖人すらも爐に親しまず時あれるらし

うつそみの眼に見る形のさながらに五百歲經たる釜にしありけり

古の鎌倉人の心なほくありけむ知らる肩つきの釜

いその上ふりし鐵色あかねさび形も神さびたぐひ知らずも

いにしへの煮えの音偲び一人居り聖さびすも梅かをる夜に

春雨に雪とけ流れ山川の溢れみなぎる思す吾は

現世の人の氣絶えし眞夜中に聖の釜の煮えの音を聞く

墓掃除

八風

時ならなくに今日の空かすむか、澤き語立てる枯野の末にいや遠くかすかに見ゆる雪の山。

畠に休らふ里人の畑草のけむり風もなく、桑のさ枝に少女子の手拭とりて結びたり。

蝶の雰賀ふ駒曳きて、人の出てゆく村はづれ、小鳥とびかふ枯木立、石碑少き村の墓地。

年の明くるも近づきて、代々の祖先の御墓邊の落葉掃ふと來れるが五人六人語り合ふ。

高き石碑の幾基の立ち並べるに樹きたる墓場、標の石小さく、何れ誰のとわき難し。

夕の山

甲之

水は音立て流るとも淋し夕山。少女らの放りの髮をゆふ山に雉子も立たず淋しき山路。

木葉ふみつゝ谷行く旅人うたふとも聞く人あらじ、汝か歌を心無き山の空氣に響かせよ、淋しきとても佛あり。

花を入れたる巻貢ひて、
小鍬肩にし、杖による
御墓掃除か、老の身の
辿八十路は越えぬらし。

帶手にせる八歳の兄、
花なつかめる六歳の妹、
孫にや、二人伴ひて
御墓の前にひざまづく。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
コレ拜まぬか、拜まぬか。」
直に祖父の傍に
愛兒小さき掌を合す。

兄がならひて唱ふれば、
姉も亦「南無阿彌陀佛。」
祖父孫三人もろ聲に
「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

ふめば音する槍落葉
掃ふと、翁帶とれば、
一つ一つに冬の草
とりては捨つる兄妹。

「是は誰の」と兄問ふに、
「祖父のお祖父の」と敷ふれば、
「お祖父にもお祖父があつて？」
「オヽあつたとも、あつたとも。」

「是は誰の」と妹いふに、
「それは祖父のおッ母のよ。」
「お祖父にもおッ母があつたの？」
「オヽあつたとも、あつたとも。」

「祖父もおッ母の膝の上に
抱かれし小さき時があり、
祖父のやうなるお祖父の手に
わが手引かれて、幾度か――

「大きなる葉に、白い花、
是は何の木、何なる木」
「其れは枇杷の木、枇杷なる木、
お祖母の墓のしるしの木。

我が手引かれて幾度か
御墓掃除もお祖父と祖父、
御墓詣もお祖父と祖父、
むかしは祖父もまた坊よ。」

掃除し終えつ、白砂の
御墓の前に筒さして、
二人に花を手向けしめ、
翁土瓶の水そゝぐ。

「奇麗になつた、奇麗になつた。
祖父かお祖父も嬉しかろ、
祖父かおッ母も嬉しかろ、
南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

祖父も久しは世にあらず、
祖父の御墓もこの通り
二人來て爲てくれるのを
見ん日は如何にうれしかろ。」

「何所から」「お祖父は」といふかれば、
「天道樣の蹄らする
西の遠空、極樂の
お阿彌陀樣の御許から。」

祖父は四本の指を伸べ、
「これだけれるとお正月、
坊は祖父とまいるか」と
いへば、妹も「私もよ。」

巻をまた負ひ、杖とりて、
靜に「サア」と立ち上がる
翁の先にかけ出る
兄を妹の追ひゆくを、――

「コレ〳〵それ程走るな、走るな。
それほど走ると、直轉ぶ、
傷する、傷をする、コレサ、コレ」

時報

羽村求道會の消息

西多摩郡羽村に於ける求道會ほど不思議にして健實なる小集會はあるまじ、二月二十日久し振りにて求道會は開かれたり、此日近角は學舍の葛原と共に之に赴きたり、薄暮停車場に着すれば既に青年の人々は待設けられたり、相携へて畝の間を逍遙し、會場禪林寺に着す、忽ち同志十數人爐を擁し、團欒して信仰の談に入る、元來此地宗敎の習慣毫もなかりしを以て特に宗敎夫自身の爲に信ずるに非らずして、唯自己自身の安慰の爲に之を信ずるのみ、既に信ずれば他の苦めるの人に對して之が樂を共にする自然の情のみ、屢々求道會を開く之が爲のみ、特に傳道的意志を挾むにもあらず、對抗的態度を持するにもあらず、何れも日常內心の實驗を傾けて一の腹藏なき所、眞に一室の信仰的同朋也、時刻至りて開會、葛原病中の所感を述べ、近角は捨身求法を說きて佛陀は吾人の生命なることを述ぶ、聽者皆眞面目にして長幼皆熱心なる求道者なり、此地從來氣風率直にして毫も屈撓することなし、故に一時は頗る荒々しくして自由黨の壯士の如き此地より出づるもの多かりしといふ、今や氣運極まりて漸く耳を宗敎に傾けんとす時勢の推移實に測るべからざるものあり、而して一たび宗敎の眞味に接するや淸新にして玩索其深きに達する豫想外に至る、特に青年の多くは故佐木々氏なる理想的小學敎師のために敎育せられ直狀徑行極めずんば止まざるの風あり、此に於てや人皆理想を逐ふて止まず奮鬪激厲遂に最後に信仰を攫むに至る、實に信仰的理想鄕也、冀くは慈光悲雨長へに此鄕を照し此田を養ひたまはんことを、會後信仰談を繼續し、夜半に至り、互に心胸を開拓す、多摩河畔の小旅店に宿して、倩々宿緣の不可思議を懷ふ、翌朝亦有志集り來りて又歎異鈔の講義を聽き、談信仰の極に及ぶ、全体此地に基督敎牧師を導きしは我也と告白すれば、我は之に反對して佛敎演說を開會せし也と云ひ、佛敎を輕侮しつゝ法に入りし也と言へば我は他力は無氣力也と考へしが之を信じて初めて絕對の力あるに驚けりといふ、時に春雪皚々として多摩河畔一望の銀世界となる乃ち、之を踏て歸る、同地消息の一端左の如し

近角先生私は今回我が子の病に因て佛陀の大慈悲を一層深く味はせて戴き又其病兒を助けて戴きました

去る十月二十五日出生の男兒ふと病に襲はれ左程重病とは思はず居り候處去月二十五日祖父の三十三回忌を聊か營みし節ふと來られしは現今醫學修業中の島田六助氏の令息にて病兒を見られ是れは一寸の樣子より も餘程惡し早く診察を受けられふとの御注意に對し直に醫師を迎へしに曰く初診の時よりも病に變動を來し候に付非常に惡く全快覺束なしとの事故小生は此處に意を決して半ば死の宣告を與へられたる小兒を抱て最終列車に投し東京小兒科院に向て進行中生も死も元より佛天の御計ひ如何ともする事能はずとは思ひながら凡夫の悲しさ是非助けたい直したいと云ふ念は去らん欲して去ること能はず或は車中死か絶命かを懸念しつゝ心に浮みしは孫て先生より御示し下され候涅槃經の七子あらんに母の愛平等ならざるにあらざれども病める子に於て心偏へに重きが如し云云の事に候佛陀の大慈悲は私の如き罪惡深重なる者に向ては重きを置かれて御敎ひ下され小生が今病める子を抱て苦みつゝあるは兩親の慈悲其大親の佛陀無限の大慈悲を御示し下され候ものと感謝の念佛申ながら夜十時着京親戚より電

話にて照會致し候處夜中は院長の診察はなけれども入院を許すとの事故直に腕車を屈ふて診察を乞ひしに不計院長は寢衾の儘にて診斷ぜられ申さるゝには百日位の小兒の肺炎餘程六ヶ敷且つ此子は胸中總て惡しき故生命は請合はれぬとの事に付此に至ては最早人間の力の及ぶ處にあらず唯自然の御計ひにまかせ奉る外無之と決心致し入院手續を了し愚妻一人を殘て看護婦を雇ひ歸宅致し候其後兩三日は到底治療の見込もあるまいと思ふ位に候ひしが夫れより快復の期に向ては院長其他醫師も不思議を感ずる程の魂力を以て快愈仕候前陳の事實の如き當地者の習慣として年忌其他佛事には婦人許りなるに島田氏の令息の來られしは不思議又夜中別に請求もせざるに院長の診斷ぜられしは是又不思議私しはドウ考へても今回の事は佛陀の大慈悲を實際問題を以て殊更に御示し下され且つ一人の男兒を御救ひ下されしものと確信致すの外無之候先年小生の弟惡其極點に達せし當時一子を失ひ前非を悔ゆると悲哀と交々至り大苦悶の際不思議の佛緣に因て先生の溫容に接するを得信仰の道に御導き下され又我子の病に因て大慈悲を示し賜はりし事小生の不學筆盡す能はず口に云ふ能はず只々感謝の念佛申のみに候佛性の洪大なる人間凡小の智を以て知ること能はず今日迄善だの惡だの順境だの逆境だのと云ふて居つた事も皆佛陀方便御引接の賜ならざるはなしと確信仕り此信心を與へられたる廣大の御慈悲を奉感謝候南無阿彌陀佛

二月九日　羽村　中里新五郎

安中佛敎青年會涅槃會

上州安中に於ける佛敎會は去る明治十五年頃より繼續して今日に至り、益々眞摯求道の氣運に向へり、蓋し同地は故新島氏の出産地にして基督敎行はるゝが爲め、佛敎者亟に覺醒する所あり今日に至るまで東京る於ける佛敎知名の人々必す此地に說かざるはなし、之か爲め佛敎の研究方面は頗る進步して、理論的研鑽は既に業に爲し得へきを盡して、遂に之に飽きて今や正に切實なる求道心を惹起すに至れり、二月十五月涅槃會を卜して演說會を開かれ、近狗は之に赴けり、午後三時着待ち兼ねたる聽衆に對して、涅槃の實驗的意義及び涅槃經に於ける如來の大悲を說く、會後信仰談話會を開き、熱心なる會員諸氏團欒して胸臆を披く、特に近時信仰界の思潮に對して詳かに說明し、基督敎及佛敎の信念につきて精微に其實驗の心狀に及べり、蓋し同地方は舊藩時代より敎育頗る整ひ、既に高山彥九郎の如き淸潔の人士の出つる所、將來宗敎的實驗の舞臺として頗る有望の地たるべし、翌朝曉に乘して田園の間を徘徊す、妙義、赤城、白根、黑髮、榛名、五色の屛顏笑て吾人を慰むるが如し、冀くは巒峯と共に長へに淸新の信念磅礴勃興し來らむことを

▲求道學舍日曜講話題

平等の大悲(一月二十八日)
招喚の聲(二月四日)
常行大悲(二月十一日)
涅槃の意義(二月十八日)
信後の修養(二月二十五日)

▲第二求道會講話題

暗夜の燈明(一月二十七日)
報謝の大行(二月三日)
佛智海(二月十日)
信仰の中心(二月二十四日)

信仰講話會

本誌二月分は遂に休刊と相成り怠慢の罪申譯無之候偏に御宥免願上候也

求道發行所

求道會館設立喜捨金受領報告(第拾貳回)

金參百貳拾五圓(即納)　東京　大草慧實殿
金　壹　圓(即納)　加賀　佐々木了應殿
金　壹　圓(即納)　東京　高梨はるの殿
金　壹　圓(即納)　東京　島中雄三殿
金　貳　圓(即納)　東京　前島良方殿
金　貳　圓(即納)　周防　石野準殿
金　五　圓(即納)　陸中　赤澤又吉殿
金　五　圓(即納)　某　女殿

小計金參百四拾貳圓也

通計千五百拾壹圓八拾八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候茲に謹んで感謝奉り候也

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操淸淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也

昨年已來。聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祐と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし、此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す幸に篤實なる先輩の指導に從ひ忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむことは是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく。其不便を感ず事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に實行の緖につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時のに進むることを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ淸潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也、本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月　發起者　近角常觀

東北三縣 饑饉救濟に付大方の義捐を乞ふ

日露の戰爭は終極を告げて滿都の人々は殆んど毎日歡呼して此の勝利を祝し凱旋の將士を迎接するに忙しいといふ有樣でありますが、然し我々は獨り此の喜びと嬉さとに醉ひて一方には苦みと悲みとに涙の絶ゑ間のない國民の澤山に居ることを忘れてはすむまいと思ひます、這の度の東北三縣（福島、宮城、岩手）の饑饉の慘狀は、實に我々豫想の外に出て〻居ります、殊に其の最も甚しき地方に至りますと米の產額は絶無と言つても決して差支がありませぬ、一般中流以下の人々は、今日では種々の草木の葉、或は樫の實などの類ひを以て僅に飢を凌いで其の日其の日を過ごして居るといふ狀態で此等の食物の分析の結果を見ますると、眞に無害に腹が滿たされるといふだけで、毫も身體の養ひとなるべき成分はないといふことであります、勿論各地方廳に於ても此等の憐むべき窮民を救助するに就いては、出來るだけの方法を講じて手を盡しては居るのでありますが、然しながら、何分多數の人ではありますし、果して此等の方法が滿足に效果を奏するやも甚だ危まるゝのでありまして、且つ目下の急を救ふには仲々此等の方法のみを依賴して居つたのでは、とても安心する譯には參りませぬ、天下の仁慈深き人々よ、此等の窮民の中には、其の一家を養ふべき力とたよるべき男子が己が一家一族のかゝる悲慘の狀に陷るべしとは夢にも知らず、安んじて滿洲の野に屍を曝して居るものも少なからざることを記憶せねばなりませぬ、戰爭が漸く終へて飛び立つ樣な嬉しき心を抑へ、喜ぶ家族の顏を見んとて故鄕の門邊に立つた時、一家の父母妻子が骨立ち、肉落ちて泣きに泣きくづれて居るといふ憐れな話しも數多きことを知つて貰はねばなりませぬ、特に今や此の地方嚴寒膚を刺すばかり、雪は毎日降る、仕事は出來ぬ、堀るべき草根も、摘むべき木葉も、最早盡き果てました、我々は微力のものでありますが、此の現狀を目擊し、其詳聞を耳に致しましてからは、一時も晏然として居るに忍びない氣が致します、謹んでこゝに此等三縣の賴りなき人々に代り、敢て世の仁人に訴へんとするものであります、思ふに諸君一盞の酒を節するも、また以て窮民の心を慰むるに十分なるものがあるでありましよう、我々は必ずしも、其額多きが故に其の功德大なりと言ふものではありませぬ。

義捐金は一口金五錢以上とす

義捐金募集期限は本年三月三十一日迄とす

東京市淺草區山之宿町十九番地東光社內

佛敎主義 **新聞雜誌聯合會**

追て右義捐金應募各位の御便宜を計り本所に於て御取次可申く尙ほ右御芳名は本誌に掲載可仕候

求道發行所

右第一回取扱報告

金壹圓　澤田すま殿

金貳拾錢　宇佐美峯子殿

常盤文學士纂

佛陀之聖訓 第四版

定價（上製金卅五錢／並製金廿三錢）郵稅各四錢

拾部以上は特別減價一割引の上郵稅を負擔す

朝日新聞曰く

宗派の異同を問はず一般佛敎徒たる者が日夕讀誦して攝心修養の資とするに足るべき簡單なる小冊子の缺乏せるは、苟も籍を佛敎徒中に揭ぐる者の均しく遺憾とせる所なるが、今此書は此需要に應ぜんとて、常盤文學士の編纂したる者にして、印刷製本の體裁誠に手頃に出來たり。從來此種の著にして、最も世に行はれしは、齋藤閑精師の「佛敎或問」、ケーラス博士原著「佛陀の福音」等に過ぎざりしが、前者の眞宗に傾きたる、後者の餘りにバイブルを模倣するに過ぎたる、兩つながら飽かぬ節多かりき、今此書出て〻初めて多數佛徒の渴を醫し得べきか、此書は編者が一般佛敎に涉りて、明了の概念を與ふべき語句を、最古の佛典中より選出し、原意を損せざる限り、勉めて邦文的に書き改めたるものなりといふ、其最古の佛典のみより取れるは甚善し、質撮簡淨なる純無雜の佛意を窺ふに足ればなり（下略）

發行所 東京市小石川區白山前町卅一番地 無我山房

取次所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

馬酔木

一冊拾錢郵稅五厘

六冊已上郵稅不要

第參卷第二號要目

（二月十五日發行）

▲卷頭言……伊藤左千夫
▲萬葉集新釋……左千夫記
▲御嶽の歌會（左千夫、豫眞、八風、甲之、蝉宝、柿人、汀川、桃村作）……長塚節
▲氷塊一片……安江不空
▲蠟爽山落木（一）……三村阿岐良
▲チヤン芝居の一夜……岡木倶伎羅
▲靜（課題文章）……岡田撫琴
▲同……法師
▲同……望月光男
▲手（課題文章）……鶴村
▲同……左千夫
▲無一塵庵歌帖……磯山主人
▲寵（新體詩）……上野一也
▲滿洲迦年……柿の村人
▲歌日記……黃鹿
▲小春半日……左千夫選
▲選歌……
▲東京歌會……
▲第二十六回沼津短歌會……
▲杜陵短歌會……節
▲靜（課題歌）……同選
▲秋樹木……

發行所 東京本所茅場町三ノ十八 根岸短歌會

眞宗四大聖典特價發賣報告

●●●日本宗教界近古未曾有の一大寶典●●●

文學博士 南條文雄師
文學博士 井上圓了師 監修
眞宗京都中學講師 蕪城賢順師 謹輯

新美裝

眞宗四大聖典

本典の内容は三部經七祖聖教教行證文類淨土文類聚鈔愚禿鈔三帖和讃御文章改悔文佛名法典等

須要の諸文に幷に譬喩勸誡の語を引用し宗義研究家のために一見其要旨を知るに便なる懇切なる冠註を附記し求道家のため罪惡觀無常觀を始と信念の實感難信の理由念佛の意相處世の用心等に關する凱切なる聖訓を列擧したるものにして眞宗の各派に共通し佛祖歷代の聖訓眞宗の要義骨目收めて此一卷に在り而して漢文は悉く假名交り文に復し全編凡て句讀振假名を附しあれは何人にも讀み易く寸珍本なれは携帶に便利なる寶典なり

●眞宗假名聖典 内容 假名聖教三十九部合本 上製 定價一圓五十錢 特製 減價一圓 郵稅十錢
●新式眞宗聖典 内容 句讀△索引附正信偈△偈文△三帖和讃△五帖一部御文△三部經其他勤行用集全部完集 上製 定價八十錢 減價五十錢 特製 定價一圓二十錢 郵稅十錢
●袖珍眞宗聖典 内容 同上 上製 定價一圓 減價四十錢 特製 定價八十錢 減價六十錢 郵稅四錢

●上製 堅四寸四分 横二寸二分五號活字 用紙舶來上等假振名附 印刷鮮明七百頁 緞布クロース脊表金文字入 堅牢洋綴寸珍美本 定價八十錢 減價七十錢 郵稅十錢

●特製 總黑色柔皮卷脊表金文字入三方總金堅牢洋綴寸珍美本函入 定價壹圓五拾錢 減價一圓廿錢 郵稅拾錢

●●●此書を携へざるは眞宗の教徒にあらず●●●

申込所 法藏館 京都市東五條二番 電話本局六八二

三月製本出來四月中の申込者に限り或賣を以て反賣す

▲●古今無比親切の講義 ●會員募集●▼

初號 二月廿日發行

第二回

佛教通俗講義

時代の要求に應じて生れたる本講義は佛教の何たるを覓ふに必須の佛典二十餘科を揭け佛教知名の大家に講ふて最も平易親切に假名をも附して講せしもの且つ會員團體の講讀法を設け非常の割引を以て是を頒たんとす請ふ天下の諸士這前代未聞の講義に接し偉大なる佛教の妙味を知れ●各講義完結の上は目次表紙を附す

●見本御入用の者は三十五錢送れ直送本

佛教概論 村上專精師 臨濟錄 勝峯大徹師
十善業道經 釋雲照律師 無門關 釋宗演師
佛遺教經 大内青巒師 辨道話 高田道見師
法華經概論 田中智學師 觀音經 大道長安師
勝鬘經 前田慧雲師 圓覺經 大内青巒師
禪關策進 澤山營策 山田孝道師
若生形山師 馮

●本講義錄は哲て全部の完成を期す故に奮て會員として申込を希ふ▲會員には會員章を呈し光融館發行圖書は一割引とす▲甲種會員は三月分會費一圓六月分一圓九十二錢一年分三圓七十五錢の會費前納者とす▲乙種會員は十名以上の團體購讀者にして各員につき▲三月分會費九十五錢六月分一圓八十錢一年分三圓五十錢の割にて會費纏めて前納せる者とす

阿彌陀經 吉谷覺壽師 金獅子章 龜谷天尊師
無量壽經 齋藤唯信師 天台四教儀 織田得能師
無量壽經 島地默雷師 十不二門論 島地大等師
南條文雄師 即身成佛義 釋慶淳師
梵文金剛經 近角常觀師 往生淨土論 道重信敎師
歎異鈔 質疑應答錄

發行所 東京神田駿河臺お水茶の角 電話本局二千九百九十九番 光融館

取次所 全國著名書店にて販賣又は會員申込扱ふ

◎◎最新刊◎◎

近世高僧逸傳

文學博士 南條文雄先生序
文學士 本多辰次郎先生著 製本既成

全一冊正價金二十錢郵稅金二錢

我國千有餘年間各敎の維持となり、敎育、宗敎、政治、文學、美術等凡百の事物殆と皆其開鑰を握りたる者は是れ佛者の力にあらずや而して近世に於ける是等諸大德の事跡湮滅して世に傳わらざる者多く之を綴るに杳として更に知るに由なく洵に昭代の恨事と云ふべし佛敎史に精通せる本多先生此に見る所あり多年の間苦心蒐集したる者本書是なり乃ち近世に於ける各宗先德諸師の美談言行を揭げ來りて餘香芬として、紙上に溢れ人をして百花園裡に逍遙せしむるの感あらしむ、

發行所 東京飯倉町五丁目 電話新橋二九七二 森江書店
發賣所 本郷區春木町二丁目 森江分店

○佛敎家必讀の好雜誌○

一大月刊 刷新 理想

毎月一回一日發行 一部三錢 五厘 一ヶ年前 金四十錢

▲本誌の特色——『本領』には人生問題宗敎問題其他諸般の出來事を一種の敎材として評論し解釋し世の指導となる◎『講話』には佛敎各宗及社會名家の講話を載せゐながら其人に接する思あらしむ◎『時論』には各宗派に涉り忌憚なき評論をなし鋭鋒當るべからざる概あり◎『研究』には佛敎敎理歷史等に關する學說等を載せ◎『家庭』欄には新日本に於ける家庭問題につき斬新の記事を集め◎『雜錄』には高僧名家の逸事其他の趣味ある記事を載せ◎『談片』には本社員の訪問又は通信によれる名家の談片を載す是等は宗派に關係なく何等の制肘なき本誌のみ能くする所なり

▲地方讀者の便利——『文藝』欄には漢詩（釋清潭先生）◎和歌（土岐善靜先生）◎俳句（喜谷六花先生）◎新體詩（赤尾文學士）の選評、並懸賞募集をなし地方の讀者に文藝自修の便を與ふ

▲本誌の主任記者——加藤咄堂、安藤鐵腸、柘植信秀、飯阪圓收、赤尾自嶺、來馬琢道久田大賢の諸氏にして俱に本誌の爲に力を盡さんとす◎見本は郵券三錢を送られよ一部限り進呈す

東京淺草新谷町一〇 理想社（電話下谷一二六三）

近角常觀著

信仰之餘瀝 第七版

定價 上製二十錢 並製十五錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區四丁目五番地 文明堂
賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著

懺悔錄 再版

（附錄「歎異鈔」）

定價 貳拾錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 森江分店
賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十九年二月廿七日印刷
明治三十九年三月一日發行

發行兼編輯人 百目木智璉
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地 求道發行所
東京市神田區神保町 東京堂
大賣捌所 同 本郷四丁目 文明堂

前號要目

◎本年の『求道』　求道

◎人生と信仰

◎信仰内面の光景　感懷

◎佛陀は吾人の生命也◎我子の夭折◎如來の御はからひ◎求哀懺悔

△「羽村」の音づれ　講話

◎聖教の重要　聖師　近角常觀

◎ジヤータカ釋尊傳—佛誕生

◎年生の追憶、信仰の告白　告白　島中雄三

◎讀書覺錄　讀後　研究　常盤大定

◎歡喜妙—序說　近角常觀

◎我は迷ふ　嘆　哀

◎小さき詩篇　左千夫

◎友の文見て　時報　常甲　音之

○時年の求道感合日曜講話○女子信仰講話會○第二求道會十曜講話○第三求道會講話○各求道會講話